

塩竈学問所公開講座ブックレット

第七回 塩竈学シンポジウム報告集

ちがのうら

千賀浦の魅力

くその景観を未来へ引き継ぐためにく



表紙 志波彦神社鹽竈神社境内から「千賀浦」を望む

「千賀浦」とは塩竈湾内を表す言葉として、古くから親しまれている名称です。
その大部分は「特別名勝松島」として国の文化財に指定され、古の景観を今も望むことができます。

千賀浦の魅力

その景観を

未来へ引き継ぐために

目次

はじめに

第一部 基調講演

「千賀浦の魅力」

藤沼 邦彦氏（元弘前大学人文学部教授）

5

第二部 講演

「千賀浦を取り巻く文化的遺産」

高橋 守克氏（多賀城市立山王小学校校長）

21

第三部 塩竈学フリートークキング

「千賀浦の景観を未来へ引き継ぐために」

藤沼 邦彦氏

高橋 守克氏

渡辺 誠一郎（塩竈市教育委員会教育部長）

35

日時 平成二十一年三月二十九日（日）

午後一時から

場所

ふれあいエスパ塩竈
エスパホール

はじめに

塩竈は風光明媚な地形から、古今和歌集をはじめ古くから多くの歌に詠まれてきました。また、奈良時代には陸奥の国府多賀城の港として、江戸時代には仙台藩の港として栄えてきました。

その港町・塩竈の豊かな歴史に触れていただき、市民の皆様のご郷土への愛着を育むことを目的に、「塩竈学まちづくり学習事業」が平成十三年度からスタートしました。

本書は、その事業の一環として実施したシンポジウム「千賀浦の魅力」その景観を未来へ引き継ぐために」をもとに、講師の方々に加筆していただいたものです。

今回は、古の昔から独特の景観を有し、訪れた者に感動を与えてきた文人墨客あこがれの地「千賀浦」をテーマとして、この地のもとで培われてきた塩竈の文化や歴史的な経緯を踏まえ、今後どのようにこの景観を守っていくかを考える機会としました。

基調講演として、元弘前大学人文学部教授の藤沼邦彦氏には、千賀浦の歴史的な文化遺産の解説を通して、千賀浦の魅力についての詳しいお話しをいただきました。

また、第二部として塩竈市文化財保護委員会副会長で多賀城市立山王小学校校長の高橋守克氏には、千賀浦を取り巻く埋蔵文化財を中心として、太古の人間が千賀浦においてどのような生活を営み、どのようなものを遺してきたかを分かりやすく、遺跡などから千賀浦の重要性を解説していただきました。

また、第三部に開催いたしました「塩竈学フリートークキング」では、講演を頂きました藤沼氏、高橋氏に、塩竈市教育委員会教育部長の渡辺誠一郎を加えて、「千賀浦」の今後を会場の皆さんとお話いただきました。

本書を通じて、その長い歴史と、時代を生きた先人たちの思いに触れていただき、市民の誇りであり、一度失ってしまったら元に戻すことは難しい、「千賀浦の景観」を未来へ引き継ぐために、私たちは今何をすべきかを考えるきっかけとなれば幸いです。

本書を作成するにあたり御協力いただきました講師の方々はじめ、関係各位に対し、心より御礼申し上げます。

平成二十二年三月 塩竈市教育委員会

講師プロフィール

役職等…平成21年3月現在

■ ふじぬま 藤沼 くにひこ 邦彦 氏（元弘前大学人文学部教授）

宮城県石巻市生まれ。東北大学文学部大学院文学研究科修士課程修了。

宮城県教育庁文化財保護課・東北歴史博物館・宮城県多賀城跡調査研究所で文化財保護に従事する。その後、弘前大学人文学部教授となり東北地方における縄文文化を研究。

主要著書 ◆『亀ヶ岡文化の世界』

（弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター 2005年）

◆『青森県史』資料篇考古3・4（青森県・共編著 2005・2003年）

◆『歴史発掘（3）縄文の土偶』（講談社 1997年） など

■ たかはし 高橋 もりかつ 守克 氏（多賀城市立山王小学校校長、塩竈市文化財保護委員会副会長）

宮城県栗原市生まれ。宮城教育大学教育学部卒業。

塩竈市立浦戸第二小学校をはじめ県内各地の小中学校勤務を経て教育現場に携わる。

また、昭和49年からは、宮城県教育庁文化財保護課等に勤務し、県内の史跡などの発掘に関わる。市文化財保護委員は15期、30年目となる。

主要著書 ◆ 共著『岩出山町史「第一編 原始・古代」』（大崎市教育委員会 2009年）

◆ 共著『瑞鳳殿 伊達政宗の墓とその遺品「墓の構造」』

（瑞鳳殿再建期成会 1979年） など

■ 渡辺 誠一郎（塩竈市教育委員会 教育部長）

第三部 塩竈学フリートーキング「千賀浦の景観を未来へ引き継ぐために」コーディネーター

第一部

基調講演

「千賀浦ちがのうらの魅力」

藤沼邦彦氏

(元弘前大学人文学部教授)



はじめに

【千賀浦とは（千賀浦＝塩竈浦＝松島湾）】

みなさん、こんにちは。昨年四月に定年で宮城県にもどりましてから、塩竈でお話をさせていた
だくのは三回目です。一回目と二回目は縄文文化
のことでしたけれども、今回与えられました題は
「千賀浦の魅力」です。

今紹介していただきましたように、私は東北歴
史資料館に十年前まで勤めておりまして、その後
弘前大学の方に行きました。もともとは石巻出身
で塩竈に近いということで「塩竈の魅力」とは何
だろうか、私を感じていることについてお話をし
てみたいと思っております。

時々、鹽竈神社にお参りし、境内にある天然記
念物・石灯籠などの石造物などにつけられた説明
板などを読んで回ることがあります。しかし、塩

竈市内、島々も含めましたら、見ていないところ

が沢山あります。そんな私が「千賀浦の魅力」に
ついてお話をするのはおこがましい、無茶な話だ
と思いましたが、でも、いろいろ考えているうちに、
学生のころ宮戸島の里浜に行くときに塩竈港から
巡航船に乗ったこと、初夏になると島々の菜の花
が一面に咲き美しかったこと、後藤勝彦先生に誘
われて桂島貝塚の発掘に参加したこと（縄文中期
の土器がたくさん出土しました）、高橋守克先生
や塩竈市教育委員会の渡辺誠一郎さん・鈴木奈津
子さんに案内されて、小舟で島々の貝塚や塩作り
の遺跡などを巡ったこと、波があって船入島には
行けなくて悔しい思いをしたこと、浦戸の神明社
のアイヌ絵馬を調査したことなどを思い出しま
した。また、本で読んだ本町の御釜神社や源融、
の河原院にまつわる面白い話、鹽竈神社での西鶴
の好色一代男の主人公、世之介の懲りない話など
も思い出しました。そこで今日は、外から見た千
賀浦の魅力、あるいは千賀浦に潜む魅力について
お話をさせていただきます。

「千賀浦」は塩竈浦を指し、松島への入口でも
あります。なぜ「千賀浦」かという点、

- ①家屋が千家あったから
（佐久間洞巖の「東奥州塩釜社非祭弁」）
- ②多賀城にもっとも近い浦であったから
（遊佐木斎の「東奥州塩釜社非祭弁」）

③陸へ近いからの説

（塩釜村風土記書出）

④多賀浦（竹水門）が転訛したからなどの説
などがあります。どれが正しいかは分かりませんが、
塩竈の津は、「国府多賀城の津」すなわち「国府
津」とよばれておりますので多賀城にもっとも近
い浦であった国府津・塩竈浦が「近浦」と呼ばれ、
文字を飾って千賀浦と記載されるようになったと
いう②の説がもっともらしく見えます。「ちか」
の文字に「千賀」「千家」「血鹿」などの文字が与
えられております。しかし全体的には「千賀浦」
よりは「塩竈浦」の方が世に知られているような
気がします。



東奥紀行（鹽竈圖）江戸時代
鹽竈神社博物館蔵

みちのくの千家の塩がまちなからからきは人に
逢はぬなりけり
（続後撰和歌集、一二五一年）
我がおもふ心もしるくみちのくのちかのしおがま
近づきにけり
（続後撰和歌集、一二五一年）

みちのくはいづくはあれどしおがまの浦こぐ舟の
つなでかなしも (古今和歌集・東歌)

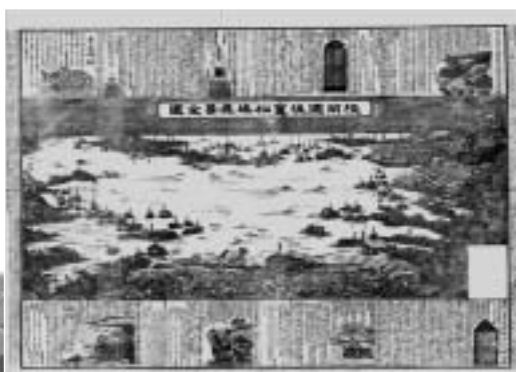
塩釜にいつか来にけむ朝なぎに釣りする舟はここ
に寄らなん (伊勢物語)

きみまさで煙たえにししおがまのうらさびしくも
みえわたるかな (古今和歌集・紀貫之)

塩竈という地名は、この地に鹽竈神社が鎮座することによるというのが一般的な考え方ですけれど、竈や釜を用いる塩作りが盛んに行われた地であることがそもそもの始まりです。鹽竈神社の神号の由来もそうだと思います。江戸時代に、松島に遊ぶ人々は、塩竈から船に乗って島々を巡り、それから松島に向かうのが普通であったようです。塩竈は鹽竈神社の門前町として、港町として栄えたばかりでなく、古くから松島の観光入口でもあったのです。ですから観光案内書は、松島と塩竈を別々に取り上げるのではなく、この2つの地名を「塩竈・松島」とすることも多かったです。

松島は箱庭のような美しい景色をもっております。日本列島という島国に相応しいこじんまりとした自然景観で、日本文化―国風文化に育まれ大切にされてきたものです。文学や美術工芸それに信仰に関わる日本文化を彩り、これを形成するものにも貢献してきました。こうした日本文化固有

の自然観に基づく松島の景観が、世界の人々に共有されるものであるかどうかは分かりませんが、風光明媚な所として王朝貴族たちの憧憬を集め、後にも「日本第一の佳境」「扶桑第一の好風」と言われた名勝松島は、世界遺産に劣らない個性的な日本遺産であることを知るべきだと思います。



陸前国塩竈松嶋真景全圖 蜂谷十馬
(明治24年)
NPOみなとしほがま蔵



特別名勝松島全景

経済のグローバル化は、世界の国々の間に凄まじい格差もたらし、国のなかでは国民の間に格差をもたらししました。世界遺産の制度は、地球上にいろんな文化があること、すなわち文化の多様性を浮き彫りにしたことで、大変な重要な功績がありました。しかし、文化の多様性を認め合うだけでなく、それぞれの文化の内容に格差や優劣の考えを持ち込んでしまったのではないかと心配しております。各国が懸命になって「世界遺産登録合戦」を繰り広げている現状をみると、そう思いたくもありません。

文化財はそれが属する文化をよく表現するものです。世界遺産として登録されなかった文化財が、あたかも価値の低い文化財であった、というように考えることはおかしいのです。文化財は変化に富んでおり、文化の多様性を示しております。文化財を大切にすることは、それを生み出した文化を大事にすることで、文化の多様性・それを生み出した民族の多様性を互いに認め合うこととなります。一方の価値観だけを押し付け合うようでは、この世の中から宗教紛争・民族的対立は無くなりません。

中東の方で、大きな仏教の遺跡を対立する教徒の人たちが破壊したことがありますね。あのようになら、一方の価値観だけを押し付けていくと、文化財というものはみんな滅びてしまうんです。中

国でも紅衛兵の文化大革命などによっていろいろな文化財が壊されました。これを上回るようなものは日本では明治の頃の「廃仏毀釈^{はいぶつきしやく}」ですね。これで全国の寺院の仏像はかなり無くなってしまいました。塩竈の法蓮寺も、江戸時代の終わりの頃は裕福なお寺であったんですけど、廃仏毀釈で今はほとんど影も無いようになってしまいました。文化財を大切にしていこうという気持ちは、本当に民族を大切にすることだと思います。



破壊されたパーミヤンの世界遺産
(アフガニスタン)

松島の自然景観を彩る歴史的景観

―「人的景観」は魅力ある文化財

一番最初に言いましたが、波静かな湾の中に多数の小島が浮かぶ松島の風景は、箱庭のような美しさを持っております。この優れた日本の自然景観に彩りを添えているのが「歴史的景観」です。松島の歴史的景観の中で重要なものは、現在も人々



国宝 瑞巖寺本堂 (松島町)

の信仰を集めている松島町の瑞巖寺や塩竈市の鹽竈神社の存在ですが、それだけではありません。

数千年前に形成された縄文時代の貝塚群や古代・中世の歌枕、松島を訪れた歌人・文人の足跡・古来から綿々と続いている地域の人々の営みやその痕跡も重要で、自然景観に溶け込み、歴史的景観を作り上げております。中央から多くの役人が赴任する国府多賀城の近くにあったことも重要です。人々の営み、すなわち人的景観は変化しますので、歴史的景観に含めることにややためらいを感じますが、歴史的景観を作り上げた要素として無視することはできません。湾内で漁をする船・遊覧する船・手漕ぎの船・帆掛け舟・漁村の佇い・櫓の音・魚を売る声なども、松島を訪れた人々の

耳目を驚かせもし、楽しませましたことでしょう。松島に関する紀行文などを見ますと、「浦こぐ舟」「漕ぐ船のつなで」「綱手ひくさま」「海人の家ども」「櫓のおと」「苦の小舟」「釣りする船」「肴分かつ声々」「藻塩焼く煙」などの語句がよく出てきます。芭蕉は、夕月夜にかすかに浮かぶ籬島を近くに眺め、「あまの小舟こぎつれて、肴わかつこゑごゑに、綱手かなしもとよみけむ、こころもしられて」と書いています。芭蕉は、小さな小舟が漕ぎ寄せ、取ってきた魚を分け合っている声々の中にも、歌を詠んだ古人の心ばえを偲ぶことができた、と言っているのです。このように人的景観も塩竈浦・松島の景観を高めたのです。でも人的景観が自然的景観の枠を越えてしまうようなものだと、景観の破壊が始まります。高層ビル・高い煙突・派手な色彩をもつ建築・大きな観光船・埋め立て・海の汚れなどは、美しい箱庭のように小さな松島の風景をいとも簡単に壊してしまいます。

また、松島は、風光明媚な神聖な土地であるが故に、死者の集まる霊場でもあります。塩竈地区には神々が鎮座する鹽竈神社があり、松島地区には死者の魂を鎮め供養する場・僧侶の修行場である瑞巖寺があります。これらは松島の歴史的景観を構成する重要な要素です。塩竈・松島を訪れると神にも仏にも逢えるし、風光明媚な景色も見る

ことができ、そして西行や宗久・松尾芭蕉などの文人の足跡も楽しめるというわけです。死者の集まる霊場としての性格は、とくに雄島に林立する板碑や散乱する火葬骨片に見ることが出来ます。とくに島の西端の頼賢碑のあたりに骨が多く散っているのですが、そのすぐ近くを発掘調査しましたら、平安時代末から鎌倉時代初めにかけての蔵骨や厚い焼骨層が発見され、驚いたことがあります。一遍上人絵伝には、松島寺の伽藍のほか、五大堂や五輪塔に埋まる雄島などが描かれております。おそらく松島湾を注意深く探索すれば、忘れられた、あるいは埋もれた歴史的景観を生み出した寺社跡・霊地跡・人々の生活の営みの痕跡をさらに発見できると思います。



雄島の頼賢碑（松島町）

塩竈の文化財を探ろう

―そして楽しい本を作ろう―

塩竈地区にも忘れられた文化財・魅力ある文化財が沢山あるような気がします。かつて塩竈市史の口絵で見い出した寒風沢神明社のアイヌ絵馬も再調査してみれば、実物資料が残り、奉納神社の明らかなものとしては、唯一の「アイヌ絵馬」であることが分かりました。寒風沢では、壊れた太鼓胴に廻船の文字が彫ってあったのを見ることがあります。大阪から発信され、石浜郵便局を経て、北上川を遡って盛岡の商店に届けられた明治時代のハガキを見たときは感激しました。塩竈神社の周辺に林立する石造物・金石文も魅力があります。井上元一さんという方のガリ版刷りの「いしぶみ紀行 塩釜篇」は力作で、これを見ると、塩竈にも沢山の、いろんな種類のいしぶみがあることが分り、ふるさと塩竈を考えるための貴重な記録となっております。こうした本が沢山あると地域社会は活性化するのだと思います。伝説や昔話、人物の逸話、噂話、民俗芸能について発見したり、記録したりすることもふるさと塩竈にとって重要なことです。

松島湾に貝塚を残した

縄文人、松島湾の貝塚群の特色

松島湾の島々や沿岸には、漁労活動を生業とした縄文人が残した、数多くの貝塚が分布しております。縄文文化は工芸的に優れた生活の道具（特に土器・漆器など）を多数作り上げていること・土偶などの祭りの道具が多いこと・環状列石のような土木工事をしていること、その文化が一万年間も長く続いたことなどで、世界でもきわめて特色ある狩猟採集文化と言われています。

縄文人は、土器と石器を使いながら食料を備蓄し、定住生活を行う世界でも特色ある狩猟採集民です。生業に関する基本的道具や技術をほとんど変えず、植物栽培にも熱心でなく、食料の拡大再生産をしないように努め、安定した小さな社会を一万年も維持することに成功した人々です。備蓄し余った食料は、手間隙のかかる工芸的に優れた



いしぶみ紀行 塩釜篇
(井上元一氏著)

生活具を作ること、祭りを行うこと、環状列石のような協同的な工事を行うことなどで、食べ尽くしてしまい、人口を著しく増加させたり、社会を大きくさせたり、著しい社会的階層が生まれたりするのを避けていたと思われる。縄文社会の中で、記念物・工芸的な生活用具や信仰的遺物が数多く生み出された背景には、食料の拡大再生産を拒否し、変化の少ない安定した小さな社会を維持するという縄文人の巧みな戦略があったのです。変化が少ない社会ですので、祭りを行うこと、協同で環状列石などを作ること、いろいろな祭りの道具や精巧で美しい土器や漆器を作ること、縄



「里浜貝塚」の貝層（奥松島縄文村歴史資料館蔵）

文人に適度な緊張と安らぎを与え、精神的にも高揚した生活を送っていたと思われる

貝塚は、縄文人が食べた貝の殻を捨てた場所、壊れたり不用になった道具や食べ物の滓なども捨てられております。一種のゴミ捨て場ですから、集落が営まれた台地の斜面などに形成されますが、単なるゴミ捨て場ではなく、生命が終わった獲物や役割が終わった壊れた道具などの霊送りの場、祭りの場であった可能性があると考えられております。

貝塚には多数の貝殻が含まれており、そのおかげで土壌が中和され、普通の遺跡では腐って無くなってしまいう動物の骨や釣針・装身具などの骨角製品、それに埋葬した人骨や犬骨などが保存されております。また貝殻の多寡・種類の違いなどで堆積層が区分しやすいという特徴があります。したがって、貝塚は考古学の研究にとって重要な遺跡となっています。また貝塚は存在する地域の自然環境によって内容が異なります。仙台湾は、大陸棚が発達し、沖で黒潮が親潮が接触するとともに、北上川や阿武隈川が運ぶ沿岸水が混じるため、そこに棲む魚介の種類も量も豊富です。そのため波静かな遠浅の入江を持つ石巻湾・松島湾には大小さまざまな貝塚が残されました。石巻湾の沼津貝塚や松島湾の里浜貝塚・西ノ浜貝塚・大木囲貝塚は国史跡に指定され、史跡公園として整備され

ているものもあります。出土品はそれぞれの東松島市奥松島縄文村歴史資料館・松島町公民館・七ヶ浜町歴史資料館、それに東北歴史博物館などで見ることが出来ます。奥松島縄文村歴史資料館や七ヶ浜町歴史資料館では縄文文化に関する体験学習も行われております。



大木囲貝塚の「大木式土器」
（七ヶ浜町歴史資料館蔵）

仙台湾周辺の貝塚群は他の地域と比較すると、次のような特色をもっています。
①縄文早期から晩期までの貝塚が集中的に分布します。石巻市沼津貝塚・東松島市里浜貝塚・松島町西ノ浜貝塚・七ヶ浜町大木囲貝塚などのように、長期にわたって形成された大規模な貝塚が多数あります。このことから貝塚を残した集落の立地や変遷、集落間の領域などの研究がな

されています。

②多くの貝塚は、沼津貝塚のように、河川の沖積作用などにより、現在の海岸線からかなり奥まったところにあるのが普通です。しかし、松島湾は土砂を運び込むような河川が無く、かつ特別名勝として景観が保護されているため里浜貝塚や西ノ浜貝塚などは、今でも海辺に位置し、「縄文的景観」を良く残しています。

③魚骨をはじめ動物遺存体の保存が良く、その種類や量も多いです。縄文中期以降になると鹿角製漁具が数多く出土します。そのため、縄文人が捕獲し食べていた動物・魚介の種類、捕獲のために使用した道具と手段、集落を取り巻く自然環境などの研究が、比較的古くから行われています。

④貝層の堆積状態がよく、分層的な発掘がしやすいので、土器や遺物の編年研究に便利です。とくに里浜貝塚や大木囲貝塚では学史上、重要な土器編年がなされました。里浜貝塚では貝層をできるだけ細分し、そこに含まれる動物遺存体から、貝層の堆積に季節性を探る研究も行なわれました。

⑤里浜貝塚のように埋葬人骨が発見されている貝塚が多いです。これによって縄文人の身体的特徴・骨に現れた病気・埋葬風習・生活習慣・通過儀礼に伴う行為・寿命などが研究されています。

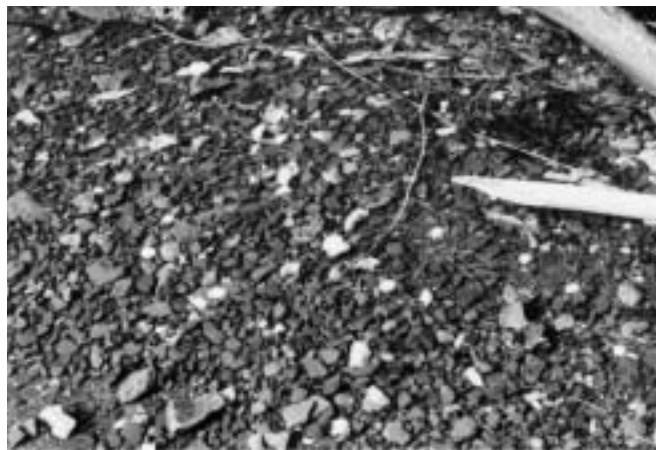
す。

⑥調査研究の歴史が古く、学史的に重要な遺跡が多いです。古くは、石巻の毛利総七郎・遠藤源七、前谷地の斎藤次郎など民間の研究者の活動も目立ちます。東北大学関係では理学部の松本彦七郎、医学部の長谷部言人・山内清男、法学部の伊東信雄など学史上に名高い錚々たるメンバーがおり、仙台湾の貝塚を利用した縄文土器の編年・動物遺存体・埋葬人骨などの研究が行われ、それぞれ個性的な優れた業績をあげています。このほか斎藤忠・角田文衛など若い研究者による発掘も行われていました。戦後は、宮戸島遺跡調査会や塩釜女子高等学校社会部、東北歴史資料館が里浜貝塚や二月田遺跡などの継続的な調査を行いました。七ヶ浜町・松島町・鳴瀬町などの教育委員会もそれぞれの町内の貝塚の調査をしており成果をあげています。

松島湾の塩作り

「塩竈」という地名、鹽竈神社という神号でわかるように、松島湾は昔から塩作りが盛んでした。この地域で最初に塩作りが行われたのは、貝塚のところでも述べましたように、縄文晩期の頃で、弥生中期頃まで続きます。海水を土器に入れて煮沸し、水分を蒸発させて、塩を取る方法で、『土器製塩』といえます。土器は全く文様の無い製塩

専用に製作されたもので、『製塩土器』と呼ばれています。製塩土器は消耗が激しく、製塩遺跡に行くと、焼けて小さく割れた破片が浜辺に沢山落ちています。塩竈市一本松貝塚、七ヶ浜町二月田貝塚、東松島市里浜貝塚などが縄文時代の製塩遺跡として調査されています。



ひつがはま 櫃ヶ浜遺跡の製塩土器 (利府町)

松島湾での塩作りは、弥生後期から古墳時代にかけて一時、中断しますが、奈良時代になると再開し、平安時代になるといっそう盛んになります。塩分は海水の中に3%しか含まれていませんので、海水を直接煮つめますと、膨大な燃料が必要とな

ります。そのため、海水の塩分を濃くしたもの（鹹水と呼ぶ）を作ってそれを煮つめ、燃料を節約しました。その方法は、塩分が付着した海藻を集めて乾燥させ、それを容器に入れた海水に溶かすことを繰り返す、あるいは焼いて灰にしたものを溶かすというものと考えられています。この工程が、和歌などでは「もしおやき」「もしお焼くけぶり」などと表現されます。御釜神社の有名な「藻塩焼神事」は、海藻に海水をかけて作った鹹水を大きな浅い釜で煮つめる方法をとっています。かなり儀式化しております。松島湾の沿岸や島々の入江には、製塩遺跡が110カ所以上分布しています。その大部分は奈良・平安時代のもので、塩竈市新浜貝塚、七ヶ浜町水浜遺跡、松島町西ノ浜貝塚などで製塩炉が発見されています。海水はどこでも採集できるのに、小さな島々にも製塩遺跡があるのは、燃料を求めて移動したためかもしれません。生産された塩は、多賀城などの役所に集められました。運ぶときに、製塩土器を容器として利用したこともあったとみえ、多賀城跡でも製塩土器が発見されています。軍防令によると、徴発された兵士は自前の食料として糶六斗と塩二升を用意しなければなりません。また、蝦夷と戦争するために、各地から食料とともに塩が多賀城に集められたり、雄勝城（秋田県）や志波城（岩手県）などに送られた記事が『続日本紀』

などに散見します。塩は調味料として役立つだけではありません。海産物などを保存したり、加工したりするのにも使われます。多賀城や城柵などで肉体を酷使して働く人々や兵士の塩分を補給するにも膨大な塩が必要でした。多賀城の外郭や政庁を囲む築地土塀や建物の土間を固く叩き締めるのにも使われた可能性があります。多賀城跡の外郭東辺で「塩竈木運廿人」「□□□所出塩竈□」と書かれた木簡の削り屑が出土しています。塩竈は製塩用の炉あるいは竈でその燃料の薪を運ぶのに二十人を要したという意味です。この木簡によって、塩作りに必要な薪を供給する山林などが多賀城の管理下に置かれていたことが分ります。平安時代中頃を過ぎると、製塩土器が松島湾から姿を消すのは土器から鉄製の大きな釜に代わるためと考えられます。

国府にとって塩生産は重要です。塩を作る漁民に求められて成立した鹽竈神社は、次第に塩生産を管理し、出荷するのに大きな役割を持つようになり、国府多賀城などの行政機関との結び付きが強まります。次第に地域の漁民を支配し、多賀城と結び付くことで広く信仰を集め、大きな勢力を持つ神社―国家鎮護にかかわる神社へと発展します。鹽竈神社は延喜式内社には含まれませんが、『延喜式』よりも古い『弘仁式』（八二〇年編纂）に「陸奥、祭塩竈神料一万束」とあります。国家



鹽竈神社の表参道

から祭祀料を請けている唯一の神社として記録されていますので、このころすでに「奥州一宮」の地位を確立していたのかも知れません。

また、明治時代の初めころ、七ヶ浜町花浜に鎮座する鼻節神社で、青銅の「国府厨印」が発見されました。「国府」はもちろん陸奥国府である多賀城を指します。「厨」は食料を調理する台所、あるいは食料を供給する場所を示す言葉です。この厨印が古代からの伝世品であるとすれば、この付近に国府多賀城に海産物を供給する施設「厨」が設置されていたと思われれます。塩竈浦は、国府多賀城の港、国府の「津」としても重要で、現在の香津町の地名は国府津に由来すると思われれます。塩竈旧街道は、今も香津町と多賀城の東門を結びつけていますが、かつては多賀城と国府津を繋ぐ重要な道路だったと思われれます。

塩竈市本町にある御釜神社は鹽竈神社の末社で

す。ご神体は四口の製塩用の鉄釜、すなわち塩釜で、祭神は塩土老翁神を中心に奥津彦神・奥津姫神の三神で構成されます。塩土老翁神は漁民に塩作りの方法を教えた神として崇められています。ご神体の塩釜も塩土老翁神が使用したものだそうです。



御釜神社の四口の神釜
(塩竈市指定有形民俗文化財)

ご神体の塩釜は四口しかありません。もとは七口あったのですが、うち三口が盗まれたといいますが、盗まれた塩釜のうち、
①一個は船で運ぶ途中に海に沈みました。そこを「釜ヶ淵」と言うそうです。
②もう一個は本町屋敷の留兵衛の田に埋められました。そこを「釜田」といいます。

③最後のひとつは富谷町志戸田に飛んで行き埋まりました。そこに「鹽竈殿」と呼ばれる古くからの神社(式内社、行神社)があります。

ご神体の四口の鉄釜(第1〜4号)のうち、第2号釜は小さめで、内法115cm、縁の厚さ約4cm、深さ6cmで、鎌倉時代の製作と考えられています。他の三口はほとんど同じ大きさで、内法137cm、縁の厚さ4.5cm、深さ16cmで、室町時代の製作と考えられています。第2号釜には耳がありませんが、他の三口には三個ずつ耳が付いているそうです。安永の『塩釜村風土記御用書出』では「大明神がこの浦で塩を焼いた釜で、御台の釜は神代からそのまま伝えているが、他の三つは後人の奉納したものと」と書いてあります。鹽竈神社文書の吉良貞経祈願状(南北朝時代一三六〇年)に「奉懸鹽竈大明神立願事……可奉鑄 御釜一口……」とありますので、南北朝時代には鹽竈神社に対し鉄の塩釜を奉納する風習があったことが分かります。

「藻塩焼神事」は7月6日を例祭日とします。神事は藻刈・水替・藻塩焼の三工程からなります。かなり儀式化されていますが海草を鹹水作りに利用するなど、古式の製塩法を彷彿させるものです。

【藻刈神事】(7月4日)

・花洲湾で海藻(ほんだわら)を刈り取る。



藻刈神事

【水替神事】(7月5日)

・釜を清掃し古い水を汲み出す。釜ヶ淵で新しい潮水を汲み、古い水を海に返す。



水替神事

【藻塩焼神事】(7月6日)

・釜の上に渡した棚の上に海草を広げ、潮水を上から注ぎ、鹹水を釜にためる。

塩竈の風景を模した「河原院」と「源融」
多賀城市の多賀城跡の南東に「浮島」という地名があり、かつては水田の中に低い島のような丘がいくつか見られました。今は水田の多くは埋め立てられ、住宅地や公園・運動場になっています。低い丘の上には神社や農家が見られますが、発掘



藻塩焼神事（宮城県指定無形民俗文化財）

- ・火打ち石で浄火を切りだし竈に点火し、鹹水を煮つめる。
- ・飽和状態になった塩の結晶を取り出す。
- ・取り出した塩を神饌とともに神前に供える
- ・出来た塩は鹽竈神社の7月10日の例祭で神に供える。

調査をしますと、多賀城跡の政庁地区に見られるような、古代の堂々とした建物跡が発見されます。館前遺跡や大臣宮遺跡などがその例で、館前遺跡は国司の邸宅跡（国司館）とも推定されています。大宮宮遺跡は、多賀城碑から南に向かう道路と東北本線が交差する付近にあり、丘の周囲は大部分削られておりましたが、調査によって大きな掘立柱建物跡の一部が検出されました。「大臣宮」という地名は、大臣神社がこの丘の上に鎮座していたことに由来します。江戸時代の記録によると、この神社は鹽竈神社の末社で、源融を祀ったものだそうです。もしかすると大臣宮遺跡と源融は何かの関係があるのかも知れませんが、今のところ全く不明です。塩竈市泉ヶ岡にも「融ヶ岡」と呼ばれるところがあり、その石碑に「とほるか岡河原左大臣源融公が東遊の際融が岡と命名せらる」とあります。

源融は嵯峨天皇の皇子で、源朝臣の姓を受け臣籍に下ります。左大臣に昇進しますが、藤原良房や基経らの執政下で権勢を揮え無かった人です。貞観六年（八六四年）、中納言のときに、陸奥出羽按察使に任命されましたが、遥任の制度を利用して、多賀城には目代を派遣して、本人は多賀城には赴任しなかった、と考えられております。

源融は、財力にめぐまれ、加茂川のほとり、六条河原に壮麗な邸宅「河原院」を構え、豪奢な生

活を送ったことで有名です。藤原道長もそうですが、『源氏物語』の光源氏のモデルの一人であったとも言われております。諸書によると河原院には、加茂川の水を引き入れて、陸奥の塩竈浦を模した庭を作り、難波から海水を運ばせては塩焼きをさせてその風情を楽しんだといわれます。『伊



とほらが岡の碑（塩釜高校敷地内）



勢物語』八十一段には、「わがみかど六十余国の中に塩竈という所に似たる所なかりけり」という塩竈浦の景色を、若い時に実見した翁が、河原院の庭の風情を見て、昔見た「しおがまにいつかみにけん」（いつのまに塩竈に来てしまったのだろう）という感慨に耽った素晴らしい歌を詠んだことが書かれている。また『古今和歌集』十六には、紀貫之が、河原の左大臣が亡くなった後に河原院を訪ね「塩竈という所のさまをつくりける」を見て、「きみまさで煙たえにししおがまのうらさびしくもみえわたるかな」と詠んだ和歌が載っております。この歌の注釈には、河原院では、毎月三十石の潮をその池に運び入れ、塩屋で焼く煙が立ち込めた、と書いたものがあるそうです。世阿弥の作った「融」という謡曲には、旅の僧が河原院の旧跡を訪ねると、桶を担いだ潮汲みの翁が現れ、ここは左大臣源融の旧邸で、融は奥州塩竈の浦の眺望を偲んで、難波の浦から邸内の池へ海水を運ばせ、塩を焼かせて楽しんだ」と懐かしそうに物語ってくれた、とあります。有名な『今昔物語』にも「今は昔、河原院は、融左臣の造りて住み給ひける家なり。陸奥国の塩竈の形を造りて、潮の水を汲み入れて、池に湛へたりけり」とあります。こうした逸話を通じて塩竈浦は王朝時代の貴族にとって文学上の憧れの場となっています。

なお、余談ですが、融が亡くなると、河原院は

融の霊や鬼が出る所として、有名になり、宇田上皇が京極御息所と河原院に行き、房事におよぶと、融の亡霊が現れ「御息所を賜りたい」と所望したので、上皇が叱りつけるとその腰に抱きついたので、横にいた御息所は気絶してしまった、という話が『古事談』にあります。類話は『江談抄』『今昔物語』にあります。

塩竈市神明社の「アイヌ絵馬」について

塩竈市浦戸の神明社にアイヌの風俗を描いた絵馬が奉納されています。その存在は塩竈市史の口絵写真で知りました。昭和六十三・六十四年度に宮城県教育委員会が行った宮城県内絵馬調査を担当した時に、塩竈市教育委員会の渡辺誠一郎さんなどと寒風沢島に渡ってこの絵馬を調査しました。その後、平成三年度に東北歴史資料館で行った「宮城の絵馬展」で展示し、その時にきちんと観察しました。その後、奉納者・絵師・奉納の目的・アイヌ絵を絵馬に取り上げた意味などをずっと考えておりましたが、さっぱり分かりませんでした。平成八年、アイヌ工芸の研究者として知られていた杉山寿栄男氏の年譜を作成するために、アイヌ民族関係の文献を渉猟していたところ『描かれた近世アイヌの風俗』（財団法人アイヌ民族博物館一九九四年七月）の中に、神明社の絵馬の構図に似た千島春里の描くアイヌ人物画があるので気が

付き、渡辺さんに連絡しました。それ以来、研究は進展しませんが、アイヌ絵馬についてまとめてみました。
アイヌ絵馬は、全国的に見ても数が少なく、私がこれまでに知り得たものはわずかに五点しかありません。アイヌ民族についての研究者である佐々木和明氏は、北海道の寺社でも見かけないと言っております。知り得たアイヌ絵馬の所在地は次の五箇所です。

アイヌ絵馬の所在地一覧

所在地	絵の内容	実物の有無	奉納場所
塩竈市寒風沢神明社	親子で鮭を運ぶ図	実物	塩竈市寒風沢神明社
青森市広田神社	熊狩りの図	実物焼失	青森市広田神社
黒石市法嶺院奥寺	アイヌ二人図	実物未確認	黒石市法嶺院奥寺
天理大学付属天理参考館	アイヌ漁労図	実物	不明
市立函館博物館	甲冑武者と五人のアイヌ図	実物	不明

①塩竈市寒風沢神明社のアイヌ絵馬
〈親子で鮭を運ぶ図〉



鮭を運ぶアイヌ
(塩竈市指定有形民俗文化財)

松島湾に浮かぶ浦戸の寒風沢島の神明社に奉納された絵馬である。神明社には、ほかに廻船の船名額や廻船を描いた数枚の絵馬が奉納されている。アイヌ絵馬は縦長のもので、周囲の額まで含めると縦140cm、横68cmの大きさである。上に大きく「奉納」の二文字が横書きされ、その下に親子と思われる二人のアイヌが鮭を運んでいる図が描かれている。父親は、額の中央から頭部にかけて髪を剃り、顎に豊かに髭を生やしている。そして鮭の口から鰓の部分に紐を通して大きな二本の鮭をぶら下げている。息子らしき若者は背負い縄の「タラ(縄)」で二本あるいはそれ以上の鮭を背負い、さらに左手に鮭

の尻尾を握ってぶら下げている。「タラ」を額に掛けた部分にジックザク(鋸歯状)文様の刺繍がなされている。二人ともやや赤く彩色された「アツシ(樹皮衣)」らしき着物を身にまとっているが、脛を出し、裸足である。父親の方は分からないが、若者は青い色をした帯らしきものを腰に巻いている。二人の着物の衤ちまの重ね方は左衤ちま(左前、相手から見ると、左の衤ちまを上に出して着物を着ること)になっている。
若者の右側に、「写」の文字や落款らしき痕跡があるので、ここに絵師の名前があったと推定されるが、赤外線テレビを利用して、他の文字を発見することはできなかった。左側下方に「藤原高次」の文字と花押がある。藤原高次は奉納者の名前と思われるが、いかなる人物か未だ不明である。



「鮭を運ぶアイヌ」と「アイヌ人画」

これと良く似た図はアイヌ民族博物館発行の『描かれた近世アイヌの風俗』(一九九二年)の17頁にある「15アイヌ人画」である。軸装・紙本着色で大きさは128.5×47.5cmとある。作者は千島春里(鳳鳴ほうめい)とされ、絵の左下に鳳鳴の名と印鑑がある。図はアイヌの親子らしき二人が鮭を運んでいる所である。神明社の「アイヌ絵馬」と比べると、絵の内容はほぼ同じであるが、反転させた構図となっている。すなわち両者の構図は裏表の関係にある。おそらく、神明社の「アイヌ絵馬」の原画は千里の「アイヌ人物画」で、それをもとに、反転させて描いたものであるろう。神明社のアイヌ絵馬を描いたものは、千里の原画あるいは模写を見ることが出来た人物であることは間違いない。どこで見たのであるろう。
神明社が鎮座する寒風沢島は江戸時代から明治時代初めにかけて、廻船の風待ち港として栄えたところで、神明社は廻船関係者の厚い信仰を集めていたという。幕末には仙台藩の軍艦開成丸の造船所が設置された所でもある。戊辰戦争の際には北海道に向かう榎本武揚などが寄港している。また、鹽竈神社の神官の藤塚式部(二七三八〜一八〇〇年)は、寛政の三奇人として有名な高山彦九郎や林子平、蒲生君平などと親交を結んでいた。そのうちの一人、林子平

は北方海域におけるロシアの進出に関心を持ち「三国通覧図説」(天明六年＝一七八六年)、「海国兵談」(天明七年＝一七八六)寛政三年＝一七九一年)を著したことは有名である。藤塚家には知明の頃にお土産として頂いたというアイヌの民芸品が伝わっている(仙台市立博物館蔵)。しかし、アイヌ絵馬の作成・奉納に藤塚知明や林子平がかかわった証拠はない。奉納と思われる藤原高次は廻船関係者か蝦夷地に関心を抱く武士であろう。実際には奉納年代も不明である。

②青森市広田神社「熊狩りの図」



青森市広田神社「熊狩りの図」(空襲焼失前)

青森市広田神社に、宝暦九年(一七五九年)に奉納された「アイヌの熊狩り」図絵馬があったが、昭和二十年の青森市空襲で焼失した。作者の小玉貞良は、江戸時代に北海道松前で活躍した風俗絵師で、アイヌ絵の絵師としては最も先駆な存在として知られている

③黒石市法領院奥寺「アイヌ二人図」

現物をまだ探し得ないでいる。図を掲載したものも無く、内容は不明である。

④天理大学付属天理参考館の「アイヌ漁労図」



アイヌ漁労図

アイヌの親子が月夜に川岸で漁をしている図である。父親は右手にマレップを握って、左手を額にかざして河をにらんでおり、サケ取りの図であろう。若者は月を見上げているが、額に「タラ」のようなものを巻いている。右側に

「蝦夷人□□図」とあるが、もともとあった文字かは疑問である。奉納者名・絵師名・年号・奉納目的も記されておらず、その上、奉納された寺社名も不明である。

⑤市立函館博物館「甲冑武者と五人のアイヌ図」



甲冑武者と五人のアイヌ図

かつて東京の古本市の入札目録に写真がのつたものである。現在、市立函館博物館で所蔵している。

上のほうに、大きく、右から左に「奉獻」の

文字がある。

目録の写真は小さく白黒である。その写真を観察してみよう。

床几に腰かけた甲冑武者と武者に対し貢物を差し出し座って頭を下げる三人のアイヌ男子、その後ろに立ったままのアイヌの男女二人が描かれている。甲冑武者は右手に弓、左手に軍扇を持つ。背の上に矢がならんでいるので、鞆を背負っているのだろう。鎧の胴に笹竜胆紋が描かれているので、アイヌとの関係から推定すれば、武者は源義経を表現しているであろう。貢物は皿にのせた鯛と台にのせた三巻の巻物である。座ったアイヌは文様の入った「アツシ」を着ている。立っている男子は「アツシ」を着て、頭に鉢巻き状のものを巻き、手にタバコ入れらしきものを持つ。女子は中に文様のある「アツシ」を着て、手の甲に入墨をし、耳飾りをつけている。画題は「源義経（オキクルミシ神）に貢物をさし出すアイヌ達」であろう。義経は蝦夷地に渡り、アイヌの神オキクルミシとなったなどの伝承をもつ。

左端に「藤原政展」と奉納者名が記されている。絵師の名前はない。右端に「安永四年乙未年 正月吉日」と奉納年月日が記されている。画題からみて、北海道か北東北地方の寺社に奉納された絵馬である可能性が高い。

「アイヌ絵馬」についてのまとめ

確認されたアイヌ絵馬の所在地は五カ所です。うち黒石市法嶺院奥寺「アイヌ二人図」は実物の所在は分りません。青森市広田神社「熊狩りの図」は昭和二十年の青森空襲で焼失しました。天理大学付属天理参考館「アイヌ漁労図」と市立函館博物館の「甲冑武者と五人のアイヌ図」は、収集品であり、奉納された寺社は不明です。したがって「アイヌ絵馬」の実物が確認できるのは三枚ですが、奉納された寺社が特定されるのは一枚のみです。その一枚は塩竈市寒風沢神明社のもので、全国的にみても貴重な資料ですので、きちんとした保存を考えるべきであります。しかも、奉納者「藤原高次」、絵師、奉納年代、奉納目的については不明であり、研究を続けていかなければならない資料です。

「千賀浦」の魅力

私が今日言いたいのは、塩竈にはまだまだいろいろな文化財が眠っているということです。

塩竈には「鳥居原」という地名があって、これを私が知ったのは焼き物の勉強をしていた時で、鳥居原で瀬戸物の土を取ったという記述で見つけたものです。そして鹽竈神社には「塩竈大明神」と書かれて、文化14年の「徳利」があります。鳥居原で瀬戸物の土を取って、何のために、どこで

焼いたのかは分かりませんが、鹽竈神社で持っている徳利は、もしかしたら鳥居原の土と関係あるのかなと思っています。

このように、まだ私たちの知らない文化財がこの地域には沢山あるのではないかと思います。みなさんもそういうふるさとに埋もれているものを再発見して、記録していけば、文化財を理解するうえで非常に役に立つことになります。そして、将来の子どもたちがそれを使って勉強できるということになりますので、ぜひ塩竈の、それこそ「千賀浦の魅力」を引き出すような文化財を発見してほしいと思います。



「塩竈大明神」の記載のある徳利
(鹽竈神社博物館蔵)

今日は時間もないので、私がちょっと興味あるものだけを例にあげましたけれど、浦戸だけでもいろいろな文化財があります。寒風沢にある「造艦の碑」なんかも、写真を記録していただければダメだと思います。やはり拓本を取ってきちんと記録し、いつでも図書館に行けば見られるようにしておかないと文化財に親しみを持つことができません。それから艦を造った三浦乾也は「陶工」としても優れた人物なので、艦を造ったという事だけで無く、焼き物についても考えていくと、塩竈の文化財の幅が広がると思うんです。これから、塩竈に関する文化財を丹念に調べていけば、皆さんの力であれば、厚い本一冊分ぐらいになるのではないかと思っています。そして、そんな文化財を自分たちの足で探して、次の機会からは私に代って報告をしていただければ嬉しいですよ。

■参考文献

- ・『塩釜神社藻塩焼神事』東北学院大学 東北文化研究所 紀要 第一号 別冊 岩崎敏夫 一九八〇
- ・『塩竈市の文化財ガイド』塩竈市教育委員会 二〇〇五
- ・『鹽竈神社』押木耿介 二〇〇五
- ・『塩竈市史Ⅲ 別編Ⅰ』塩竈市 一九五九
- ・『塩竈市史Ⅳ 別編Ⅱ』塩竈市 一九八六
- ・『描かれた近世アイヌの風俗』アイヌ民族博物館 一九九二

i 源融 嵯峨天皇の皇子でもあり歌人。古今和歌集と後撰和歌集にそれぞれ二首入っている。「陸奥のしのぶもぢずり 誰ゆえに 乱れんと思ふ 我ならなくに」(訳) 陸奥の「しのぶもぢずり」(信夫特産の振摺) 乱れ模様のように乱れる私の心は誰のためだと思えますか？私のせいで無く、あなたのせいですよ。

ii 遥任 地方官が任命されても、赴任の義務を免除され、目代を派遣して、在京のまま得分利益のみを受け取ること。(八二六年の親王任国制は遥任を前提)

iii 千島鳳鳴 伊藤鳳鳴・藤原鳳鳴・藤原與昌などの印落款を持つ作者を「千島鳳鳴」の名で総称。越崎宗一『アイヌ絵志』(九五九年)によると、オランダにあるライデン国立民族学博物館のシーボルト・コレクションを調査し、藤原與昌の印や千里の落款ら千島春里・松前春里・藤原與昌は同一人物であることが分かった。

第二部

講演

「千賀浦を取り巻く文化的遺産」

高橋 守克氏

(多賀城市立山王小学校校長)



はじめに

藤沼さんより引き続きましてお話をさせていただきます。藤沼さんには千賀浦ちがのうらにつきましましていわゆる歴史的な景観、あるいは自然景観の意義等についてお話をいただきましたが、私は、特に千賀浦沿岸部や島々で見られる具体的な歴史的、文化的遺産について若干解説を加えながらお話をさせていただこうと思います。

私たちはよく「松島湾」とか「塩竈浦」とか「千賀浦」という言葉を使います。

今は、一般的に言いますと「松島湾」と呼ばれているエリアはこの地域で言う二市三町ではあります。塩竈市、東松島市（いわゆる宮戸島のこと）、それから松島町、利府町、七ヶ浜町の陸地



(写真①) 浦戸諸島全景（手前が野々島）

で囲まれているところ、あるいはその島々を指しています。

それからこの写真（写真①）で見ると、野々島が一番手前なんです。すぐ右斜め上に寒風沢が写ってその北の方をずっと撮っている写真なんです。そのようなこれらの浦戸の島々を入れたそれが「松島湾」と一般的に言われています。

千賀浦というのは今はむしろ塩竈港、それからその外側と言われていることが多いようです。ですから千賀浦の入口としての「浦戸」という出入口としての地名が浦戸の島々には残っているのかなあというふうに思っているところです。



(図①) 大正元年の千賀浦

ただ、古代においては先ほど藤沼さんがお話ししましたように「松島」、あるいは「塩竈浦」、「千賀浦」がどのように厳密に区別されているのかわかりませんので、今日は松島湾全体を「千賀浦」というふうにおさえて、お話を進めさせていただこうかなと思っています。

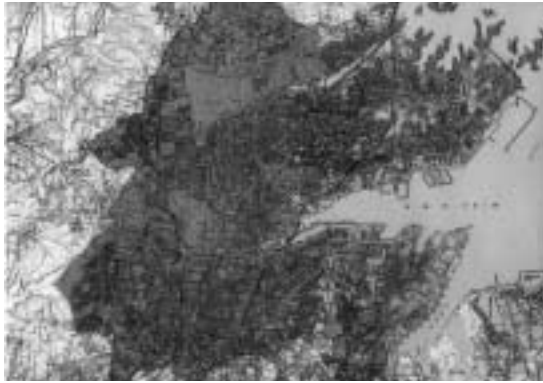
千賀浦の移り変わり

これはですね、大正元年の地図（図①）なんです。そのころの塩竈の様子がある程度わかるかなあと思って用意しました。これがさっき藤沼さんがお話されていた古い時代の様子をまだ残している地図かなあというふうに思います。

真ん中の左側ほぼ中央部が塩竈の街並みになるうかと思えます。そこからですね、右上の方に向かってずっと伸びている半島があります。これですね、杉ノ入表半島といえます。今はですね、魚市場とかになってしまっています。

その北側の半島はですね、杉ノ入裏半島と呼んでいます。その杉ノ入表半島と裏半島に囲まれたこの部分がすっかり埋め立てられて今は「新浜町」という名前が付けられています。

昔はこの南の辺りがおそらく市宮汽船等の船着場になっているかと思いますが「マリンゲート」ですね。それもこのように入り組んでいたのが、今はすっかり埋め立てられて海上保安部なんかが建っているんだと思えます。



(図②) 千賀浦の移り変わり

この地図が示すように、千賀浦はかつては入り組んでいた、きれいな海岸線を残す港だった、いわゆる「浦」だったというふうに考えられます。

ですから鹽竈神社の方から千賀浦を見ますと、とても風光明媚な、なるほどなあ、句や歌を詠みたくなるなあと思える、そのような地区だったのではないかというふうに考えております。

これがですね、その後の地図なんです(図②)緑色の部分が先ほどの地図と同じですね。この白っぽくなっているのが新しい今の地形です。ですから、この緑と今の地形との間が全部埋め立てられた所というふうに考えていいかと思えます。

ここはですね、ちょうど今の北浜地区になりますね。この辺は海岸通、それから港町で、こちらが貞山通です。このようにほとんどが埋め立てられて造られているというふうに思っていただければいいのではないかなと思います。

ですから、塩竈の発展というのは、逆にいうと塩竈の自然景観を埋め立てながら出来ていったまちづくりというふうに考えていただくとおおよそ理解できるのかなと思います。

千賀浦の縄文時代の遺跡

【船入島貝塚】

塩竈市の縄文時代の遺跡について最初にご紹介したいと思います。

塩竈の浦戸の入口に「船入島」という小さな島があります。東の方が外洋になっているんですが、船はこちらの方から入ってきます。このように入ってくるんですが、奥に塩竈港があります。小さな島なんです、この島はですね、船が入る時の目印になった、塩竈浦に入る目印になったことから「船入島」と呼ばれていました。

この島はですね、小さな島で無人島なんです、尾根と尾根の間が一番低くなった点線部分(図③)に貝塚が認められて「船入島貝塚」と呼ばれています。この貝塚では、ちょっと白っぽく見るところが波で洗われて、今ここは崖になっていて貝の様子が見えるんです。この白っぽいのが貝が堆積したところなんです。その下には黒い地層が見えます。



(写真②) 船入島の貝層

それで調査をしましたところ、この貝の部分
縄文時代前期の遺物を出土する所だといことが
わかりました。それから下の黒っぽいところから
はそれよりも古い縄文時代早期の遺物を出すとい
うことがわかってきて、これが塩竈市内では一番
古い遺跡というふうになっています。

どうしてこういう無人島に、しかも小さな島に
人々が住んだのかっていうのはわからないところ
はあるんですが、塩竈では一番古い遺跡だってい
うことがわかりました。

【大木圀貝塚】
これはですね、七ヶ浜町にあります大木圀貝塚
です。東宮浜というところにあります。このよう
にですね、塩竈の浦に突き出した丘陵の上に築か
れた大規模な集落の貝塚です。この平らな部分の



(図③) 船入島貝塚

(写真③) 大木圀貝塚の出土土器



(図④) 大木圀貝塚

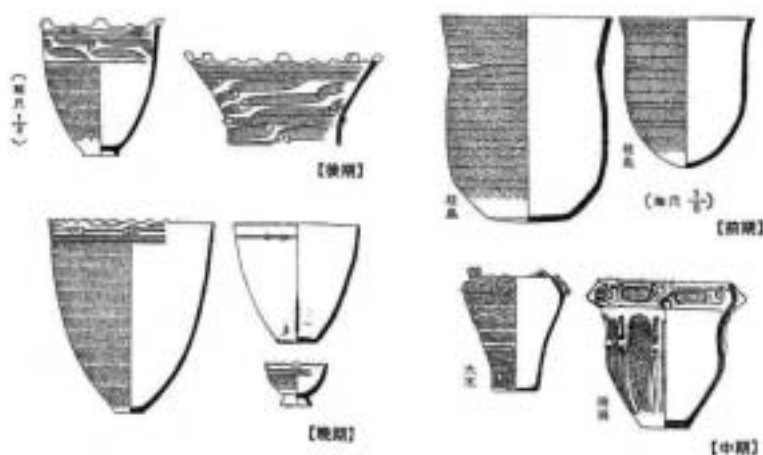
周りの斜面にかけて貝層が見つけることができま
す。

大木圀貝塚は長い間使われている大きな貝塚で
して、縄文前期から後期にかけて営まれていたと
いうことがわかりました。調査によって竪穴住居
跡、お墓、そういうものを「遺構」と言うんです
が、生活した跡が見つけれられましたし、それから
ここにあるような土器や石器などの生活の道具や
漁労の道具もたくさんみつかって、それでとって
も貴重な遺跡だということでは国の指定史跡
になりました。

さて、大木圀貝塚から出土した土器があります
が、みなさんに今日お渡ししたレジュメの一枚目
の右側に主な縄文土器の移り変わりを図に示して
おきました。一番上が「早期」という土器、底が
尖ったような形の土器が多いです。その後「前期」
の土器、「中期」の土器、「後期」の土器、「晩期」
の土器というふうに主な例をこのように載せてみ
ました。見ていただくと形が少しずつ変わって
るなあ、模様がかわってるといいうようなところ
が見受けられるんじゃないかなと思います。



(図⑤) 縄文早期の出土土器



(図⑥) 縄文前期～晩期の出土土器

このように、縄文時代は約一万年続いたと言われておりますが、この一万年の中にこういったような変化が見られるんだということを覚えて頂くといいかないと思います。

じゃあ、前期と早期とか、中期とかはどうやって古い新しいってわかるのかといいますと、先ほどの船入島で上のほうに貝の層があって下のほうに黒い土がありますよ、っていう話をしましたね。そうすると土はだんだんに積もっていきますの

で一番下にあるものが一番古くなるんですね。逆に言うと上から新しいというように並んで、下に行けば古くなるんですね。ですから、船入島といえば黒い土から出るものは上の貝殻の層から出るよりも古いですよ、ということがわかります。そうやって順番に並べていくんですね。

そして、同じような文化を持った、模様を持ったものはほぼ同じ時期のものになります。今もいろいろなものに流行があるようにですね、土器の形や模様にも流行があって、共通して名前を呼ぶために「何々式」という名前を付けているんですね。桂島から出たのは「桂島式」だよ。そうすると同じような土器が出るとそれは「桂島土器」といって同じ頃なんだね、と比較ができるようになっています。

それで、大木囲貝塚の縄文土器は前期と中期のときに地層を順番に調査して10に分けて、そして大木1式、2式、3式というふうにして大木10式までそのように分類して決められています。そのような標識の遺跡になっているものが大木囲貝塚です。

【桂島貝塚】

これはですね、先ほど私が紹介しました桂島貝塚です。私が初めて教員になって赴任したところがこの浦戸です。この写真(写真④)はですね、校舎を建てているところなんです。



(写真④) 桂島貝塚発掘現場 (旧浦戸第二小学校)

それは昭和三十八年に調査をしたときなんです、校舎の周りのこの部分に貝層が見つかりました。この裏の斜面にも貝塚が見つかりました。校舎の東側にも三ヶ所、貝のある部分が見つっています。この桂島貝塚では縄文前期、それから縄文中期の土器やいろんな遺物が出土しています。

桂島貝塚で特徴的なのは、調査した当時、塩釜女子高にいらっしやった後藤先生がいろいろ出てきた魚の骨を丹念に調べたら八割は鯛だということがわかりました。だから桂島貝塚で営んでいた人たちはお魚は主に真鯛を食べていたんだ、我々よりもグルメだったんじゃないかなあと冗談をお話されたんですけど、そのように貝塚を調査しますと、どんな食生活をしていたのかの一端がいろいろ

いろいろわかるようになっていまして、そういう面でも塩竈、あるいは松島湾の貝塚が非常に貴重なものだなあとということを理解できるのではないかと思います。

これは桂島貝塚を調査したときの写真です。(写真⑤) このように、斜面にたくさん出土器などが廃棄されて、あるいは食べた魚とか動物の骨



(写真⑤) 桂島貝塚の出土物

が廃棄されてこのように発見されます。これは土器が捨てられてまとまって出ている様子です。

ここで次の里浜貝塚に行く前にですね、ここには載せておりませんが塩竈市にはかつて「一本松貝塚」というのがありました。その一本松貝塚というのがありますね、今は海上保安部の辺りになっていてもう港湾工事で無くなってしまったのです。今、ご紹介するのは入江の千賀浦に面した小さな入江にですね、ほんとに海面に近いくらいレベルの小さな貝塚が見つかりまして縄文晩期の土器とともに製塩、塩作りの土器がたくさん出てきました。また、上のほうからは平安時代のもも見つかったりしまして、貴重な遺跡だったんですが、そんなのもありましたよってこともお話しておこうかなと思います。

【里浜貝塚】

次にこれはですね、藤沼さんたちが中心になって調査しました宮戸島の里浜貝塚というところです。昔は塩竈から船が出まして終着が宮戸の里浜だったのです。

その船着き場のすぐ近くです。こういう大きな範囲で貝塚が営まれています。今はこの場所に奥松島縄文村というのがありますので、ぜひ訪ねてみるとその様子がよくわかるんじゃないかなあと 생각합니다。



里浜貝塚

【西ノ浜貝塚】

同じように今、松島湾を囲んだ貝塚を紹介しておりますが大木圍貝塚、桂島貝塚、宮戸島の里浜貝塚に並びまして、松島には「西ノ浜貝塚」があります。場所はですね、この辺がホテル一の坊とか壮観がありまして、そこから野蒜に向かって坂をちょっと登って手樽の駅に行く途中の右側の部分なんです。そこに西ノ浜という貝塚があります。

ここもですね、宮戸島の里浜貝塚と同様に貴重な遺跡であります。そこから縄文時代の塩の遺跡等が見つかっていきまして貴重だということ、これも国の史跡に指定されています。そのとき、これは西ノ浜貝塚で出土した縄文時代の埋葬人骨の様子です。(写真⑥) こんなように、足を折り曲げた形で埋葬されていることがわかります。これを屈



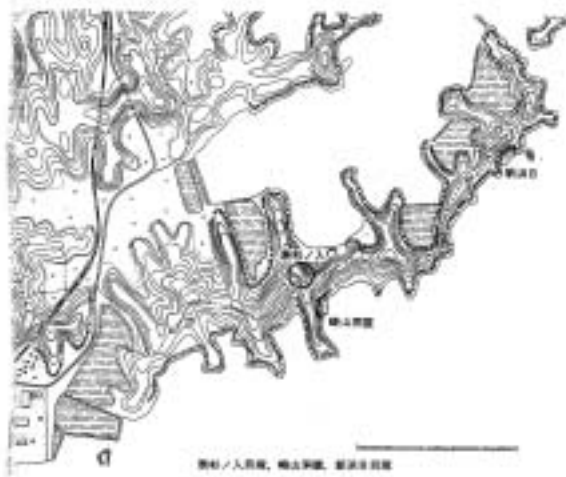
(写真⑥) 西ノ浜貝塚から出土の埋葬人骨

葬と呼んでいます。なぜ人骨が何千年も前のが残るのかといいますが、貝から出るカルシウム分なんです。日本の土は酸性で骨は腐ってしまうんですけども、カルシウムによってちょうど中和されなかな腐らない。ですから、先ほど言ったように魚のいろんな骨も残っているというふうなことになる訳ですね。先ほどお話をしたので一つ付け加えますと、大木圀貝塚ではですね、動物の骨のほかに鯨の骨とか海亀の骨なんかも見つかっておりまして、そういった外洋のもの、おそらく鯨は取りに行ったのではないと思うんですが、打ち上げられてきたようなものも食生活に利用されているのかなと考えております。

千賀浦の弥生時代の遺跡

【崎山洞窟】

次にですね、弥生時代以降の話を紹介したいと思います。これは杉ノ入表半島で、これはかつての地形で今はありません。この辺に魚市場が建ってしまったんですね。そしてこれが杉ノ入裏半島になります。この辺に水産研究所が建っていて、藤沼さんが先ほどお話しした「内裡島」っていうのはこの辺にある島なんです。この辺が「釜ヶ淵」といまして、藻塩焼神事^{しんじ}の潮（海水）を汲んでる場所がだいたいこの辺にあります。



(図⑦) 昔の杉ノ入表半島

かつての杉ノ入表半島の魚市場付近の浜に、波で浸食された洞窟がありました。それは「崎山洞窟」と呼ばれています。崎山洞窟はですね、昭和の初めに調査されたんですが、この洞窟は幅入口16m、奥行5mくらいあったというお話です。それで、この洞窟の手前側の方で弥生時代の貝塚が見つかっているということでした。

このようにですね、こういう浜でも弥生時代の遺跡があったということを理解できるんじゃないかなと思います。弥生時代の貝塚からは、カキやアサリが主食となっていたようで、たくさん発見されているようです。この他にもここから縄文時代の製塩土器や古墳時代の人骨も見つかっているということだそうです。なお、ここから出た土器は「崎山式土器」と呼ばれて弥生時代の一つの標識の遺跡というふうになっています。この洞窟も残念ながら魚市場の工事に無くなっています。

【柘形圀貝塚】

これはですね、同じ弥生時代の遺跡なんです。多賀城の大代というところにある「柘形圀貝塚^{ますかたがこいかいづか}」です。その塩を作った土器のようなんですが、(写真⑦)底を見ましたら、この辺に柘の跡が残っているんです。これを調査した山内先生というのは「石器時代に稲有り」という重要な論文を書いて、全国的に有名になった遺跡の土器なんです。

ですから、すでに弥生時代には大代あたりで米を作っていたというような証拠が現れています。また、七ヶ浜には二月田と書いて「にがで」と読むんですが、その貝塚からも石包丁が見つかっておりまして、こういう海浜に至るところまで米作りがすでに弥生時代に始まっていたなあということがわかりました。そういうことを証明できる遺跡として有名になっています。

千賀浦の奈良・平安時代の遺跡

【新浜B遺跡】

次にですね、奈良時代・平安時代の遺跡という



(写真⑦) 柵形囲貝塚 (多賀城市大代) 「もみ痕のある土器」

ことで、藤沼さんと一緒に調査した例なんですけれども、「新浜B遺跡」といって先ほどの地図でいいますと杉ノ入半島の崎山囲のあたりなんです。今でいうと新浜町のかまぼこ屋さんの海側のところですね。ちょうど向いの海側からいいますと竜頭島、蛇島とも別名言われているところです。それを手前に見る小さな細長い浜で塩作りが行われています。



新浜B遺跡



(図⑧) 松島湾周辺における奈良・平安時代の製塩遺跡

塩作りは先ほど藤沼さんがおっしゃったように、少し掘りくぼめた所に土器をたくさん並べまして、燃料の薪をくべて海水を煮立てながら塩を作っていくという土器製塩といわれる作り方です。このような作り方は松島湾の島々でたくさん行なわれました。私の一枚目の資料の地図の真ん中辺に松島湾の地図が載っているとと思うんですが、(図⑧) その地図の黒い●一つ一つがそういった塩作りに関係した遺跡になっています。小さいから見にくいかもしれませんがたくさんあるなあと見ていただければ結構です。

人の住んでいない野々島の周辺ですね、漆島とかあるいは馬ノ背島なんて小さい島がたくさんあるんですが、そういった島々の入江でもすべて塩作りが行なわれています。

先ほど藤沼さんもお話しましたが私の資料で言いますと、三枚目の右下のほうに多賀城跡からですね、木簡と呼ばれる木片に墨で書いたものが出ていますね。(図⑨) 左側のほうには急いで竈木を二十人で運ぶという記事が載っているんですね。それから右のほうも「塩竈」という字が見えるんじゃないかなと思います。そのようにです、塩の生産は多賀城が関わっていて、国の政策として塩作りが継承されて行なわれたと言うことができます。先ほど言いましたように塩を作るにはたいへんな燃料を、「薪」を用意しまして松島湾のこういう島々で行なわれていて、たぶん燃料が相当足りなくなっていたんじゃないかなと思います。



(図⑨) 多賀城跡出土の木簡

ですから、松島の松が無くなってただの島になったんじゃないかなあと思われるくらい、「松島」の字がなくなると島になりますね。上の字が無くなるとただの「島」になるということですが、さんの燃料がなくなると景観はどうだったのかなあと心配するくらい、塩作りが盛んに行なわれた地域です。ただですね、奈良時代、平安時代の塩作りの遺跡は百数十ヶ所見つかっているんですが、奈良・平安時代の中で塩作りを仮に三百年したとすればですね、そんなに同じ場所で何ヶ所でもいっぺんでやっているというわけではないので、入れ替わり場所を変えながら薪がなくなったら次の島へ、次の島へというように動きながらやっていったんじゃないかなあと思っています。

こんな島々でも繰り広げられていた塩作りなんです、それらを管理していたのがいろんな面で多賀城であり、鹽竈神社が信仰の対象として存在する訳ですね。それだけに、その頃は、全国で、唯一国から税金みたいなものを頂いて運営された神社として鹽竈神社がここに登場してくるといふふうに理解できるんじゃないかなあというふうに考えております。

【杉の入裏窯跡】

これはですね、塩竈市で唯一、杉ノ入裏半島にあたるところで奈良時代の「須恵器^{すえき}」という焼物を焼く竈が見つかった例です。(写真⑧) これ

は、新浜の今で言いますとちょうど45号線を松島のほうに向かって行きますと左側に見える杉の入小学校のほうから来る道路の十字路があります。そこを魚市場のほうにちょっと曲がっていくと市民プールありますよね、あの界限です。そのところでですね、運輸会社が駐車場を造りたいということで駐車場にかかるところを調査しましたらこういう窯跡が出てきたんですね。ここがですね、薪をくべる炊き口です。この辺が薪を燃やすところなんです。ここに粘土で作った器を入れて焼くんです。元々はこれトンネルになっているんです。天井が崩れて落ちたのでこのようになっていますが、元々トンネルで「穿窯^{ちがま}」というんです。こういった窯跡が三基見つかっています。ほとんどですね、この奈良時代・平安時代の須恵器という焼物を焼く場所は、大きな丘陵で十基とか数十基とか大きな数に分かれて、それぞれ近くで焼かれているんですね。例えば利府というと瓦焼場は地名として今も残っていますし、硯沢とかその辺にも規模の大きいですね、須恵器の焼物を焼いたところもあるんです。群としてたくさんあるんですね。そういったのが見つかっているんですが、塩竈の地質は凝灰岩の砂岩でできているので、ほんとにはトンネルを掘ると崩れそうな所なんです。ですから窯を作るのに向かないんですけど、たまたまこの部分のように粘土質のところを見つけてこのような窯を

作ったんですね。そして、小規模ながら塩竈でもこんな所だって思うくらい海のそばでも須恵器の焼物が焼かれていたと言う貴重な資料になるかも知れません。



(写真⑧) 杉の入裏窯跡 (塩竈市杉の入)



ただ、塩竈市もこれを保存しようとしているいろいろな地権者の運輸会社をお願いして交渉してくださったんですけども、残念ながら代替地が見つからないということをやむなく窯跡は無くなるということになりました。

ただ無くすのはもったいないので窯跡のレプリカを作っていたのですが、今は壱番館のタイムシップ塩竈に展示されておりますので、機会があったら見ていただくとありがたいなあというふうに思っております。

【鼻節神社の国府厨印】

これは、七ヶ浜の花洲浜にある鼻節神社です。これもですね、式内社^ニといって平安時代に書かれた書物に出てくる全国でもきちっと位置づけられた格式のある神社なんです。明治の初めに、神社を修復しようと思って工事を始めたところに、「国府厨印」という銅で作ったいわゆる四角の印鑑が見つかったということなんです。

「国府」っていうのはどこかというところ、もちろん多賀城のことを指しています。「厨印」がなぜここにあるのっていうことでまだわからないところがあるんですが、私なりに考えてみますと、ちょうど花洲浜の沖合いに、大根暗礁^{おおねあんしやう}という所がありまして、ここが塩竈に伝わる藻塩焼神事でも海草を摘むところになっているんですけど、その海草を摘むところが、日本の昆布の最南端なんです。そこで昆布は終わりなんです。そこから南では昆

布が取れない。

そして、当時の「延喜式^{えんぎしき}」というところにはですね、何が書いているのかと言うと作本昆布四十二斤、調理用の細昆布百二十斤、広昆布三十斤を毎年陸奥国から都に収めなければならぬというふうに書いてあるんです。そんなことを考えると多賀城から一番近くて昆布がとれて運べるのは花洲浜しかない。例えばそんなことを考えると一つの考えですけど多賀城から都に収める昆布をこ



(写真⑨) 鼻節神社の国府厨印

で集めて、そのための確認印が作られたのがこれなのかなあとのことです。それだという根拠はないんですが、そんなことも想定されるような印が見つかったという事です。

千賀浦の中世の遺跡

今度は多賀城が国府として機能しなくなりまして、中世になると塩竈でどんな文化的遺産があるかといいますと吉津ですね。先ほど松島で藤沼さんが「頼賢の碑」があるよって教えてくださったんですが、それと同じように鎌倉の終わりころ、元寇の後なんですけど、吉津で正安四年の板碑が見つかっています。これはサンスクリット語で「梵字」って私たちは呼んでるんですけど、大日如来の記号があって供養の碑が書かれているんですね。このような碑が吉津で見つかっています。



供養碑
地上高103cm
鎌倉時代末期
元寇(1274・1281)の後
北条氏の時代

正安のできごと 元僧一山一寧来日、『一遍上人絵伝』完成

吉津の正安4年(1302年)の板碑

そのほかにですね、塩竈ではこういった碑がどこにあるかっていうと「青葉ヶ丘」という団地があつて、その北側のところに今まとめて置かれてるんです。そこには二十基ぐらいの板碑が集められてます。その中身のほとんどが「春日撰津守」という文字が書かれているのが見つかります。春日撰津守っていうのは何かよくわからないものあるんですが、十六世紀ころに作られた天文年間という一五三二年〜五四年ころに作成された「留守分限帳」というものがあるんですけど、その中に塩竈では塩作りが四ヶ所ある。この頃は土器製塩ではなくなってるんですけど、その一つが御釜神社でそのほかに三つあるんです。それはどこかというところのように書いてあります。

佐藤玄蕃って人は藤倉に「竈」と「山」を持っています。佐藤玄蕃って誰かっていうと、今は伊達家の菩提寺にもなっている「東園寺」ですね、東園寺がその佐藤玄蕃のお城なんです。昔は「狛犬城」と呼ばれていてその城主なんです。その人が藤倉の方に山をもって塩を作りなさいというのがあるんですね。

もう一つはですね、「新大夫」という人が吉津に同じように竈と山、山っていうのは何かかっていうと塩を作るのに薪が必要ですよ。そのために山がセットになってるんですね。それで吉津のほうに山とか竈とか持ってきてその吉津の山の薪を使っ

て塩を作ってください。それからもう一つは小野っていう人がいます。越の浦に同じように竈と山を持って作ってください。といったようなことで中世でも塩作りが行なわれていたということが記録として遺されています。

そのうち「新大夫」というのは、鹽竈神社の祢宜でありまして春日姓の小野氏を名乗っているという記録が残っていますね。あの辺、吉津周辺は小野さんっていう名字が多いですよ。そのようなことで小野一族がああ辺では塩作りを中世の時代は鹽竈神社の一角として作っていたという記録からも伺えるんじゃないかなと思います。

千賀浦の近世の遺跡

次にですね、今中世のお話をしましたが近世江戸時代のお話をしますと、先ほど藤沼さんもお話しましたように寒風沢港、神明社のアイヌの絵馬がありましたけれど、寒風沢港において塩竈は語れないというふうに思います。

それは何かといいますと、伊達政宗は仙台藩の領地で取れた米を江戸に売りに行くんですね。そのために伊達政宗は宮城県内の川を使って海岸部に米を運ぶんです。その海岸部に風待港という集積地を作るんですね。それは例えば、旧牡鹿町小積浜だったり、石巻の万石浦などでたくさん船が運んでいくわけです。それから塩竈だったらこ



(写真⑩) 十二支方角石
(塩竈市指定文化財)

の寒風沢に集められたんですね。そして、そこから運河を通って江戸に米を運んで売るといような商売をしていたんです。このようなことは伊達政宗のころから始まったんです。

それで寒風沢が栄え始めるんですが、寒風沢には、仙台藩の米蔵が建ち並んでいたというような記録が残されています。寒風沢港に入ると、入る直前の右側に大きなちょっと小高いところがあります。そこが「日和山」という山です。

そこからちょうど船入島の方をずっと見ますと太平洋の日和がわかるんですね。そして沖は荒れるな？晴れるな？今日の天気はどうだろう？出発していいのかな？そんなものを見るところなので日和山という名前になっています。そこには方角石（写真⑩）が建てられてこっちの方向ではこうだ、あっちの方向ではこうだ、と見る石が建てられています。これは貴重だということで塩竈市の指定文化財になりました。

それからここに「しぼり地蔵」という地蔵さんがいます。（写真⑪）これは何かというと寒風沢港が賑わったものですから、船員さんが入ってくるとそこでたまには宴会をやるんでしょうね。そして、遊女の方々がですね、今日も日和山を見てですね、雨降ればいいな…と。わかりますね、船が出て行くと船員さんもみんな出て行ってしまう。それで船員さんが出て行かないようにということと願をかけてお地蔵さんをしぼったと、行くなという愛する気持ちがかもっているというふうに伝えられています。このような文化財が寒風沢には残っています。

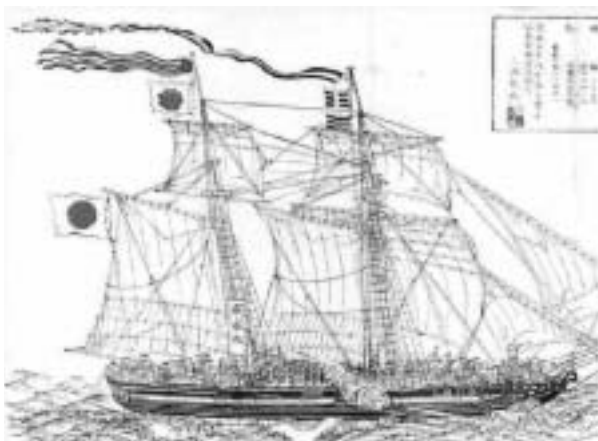
それから、寒風沢がもう一回脚光を浴びるのは幕末の頃ですね。榎本武揚が幕府軍として官軍に敗れて北海道に渡って行くわけですが、函館に行



(写真⑪) しぼり地蔵

く前にこの寒風沢に一度立ち寄って体制を立て直すというようなことで、寒風沢には一つのすごく歴史的な意味が残ってるのではないかなと思います。

これは、仙台藩が幕末の時に造った西洋式の軍艦の絵です。開成丸と呼ばれています。（図⑩）この寒風沢港で造られています。それで寒風沢港の入口にはこの軍艦を造った記念碑が建てられていて「造艦の碑」と呼ばれています。（写真⑫）写真を撮ると石は写せるのですがなかなか文字が写ることができないので、先ほど藤沼さんが言った拓本取るといいね、って話があったと思います、いずれ拓本を取って皆さん方から文字が見え



(図⑩) 開成丸帛帆図（仙台市博物館蔵）

るように提供してみたいなあと思っております。そのときに造った軍艦の絵がここにあります。



(写真⑫) 寒風沢造船の碑 (塩竈市指定文化財)

これはですね、開成丸ができて下の海「下海図」と読むんですが要するに進水式ですね。(図⑪)進水式をしたときの造船所から出てきたところの絵が描かれています。こちらは実際に帆をかけて海を航行している図が残っています。(図⑩)こんなような図が残されているのが寒風沢の造船に関わるものです。

今ざっと早足で松島湾、千賀浦を中心としながら、その中にある具体的ないろんな遺跡や遺物等々について皆さん方に説明させていただきます。



(図⑪) 開成丸下海図

塩竈にはこのようにたくさんの素晴らしい文化的遺産が残されており、皆さんと一緒にこれら大事にしながら塩竈を語るといふものにしたいたいものだなあ、というふうに思っています。先ほど言いましたように残念ながら塩竈の発展は埋め立ての歴史でもあって、昔の素晴らしい海岸線はこの塩竈の千賀浦の手前の方からでは無くなってしまいましたけれども、このような残された貴重な文化的遺産、皆さんと一緒に知恵を集めて考えていくのもこれから大事なことだなあ、と思ひまして実際にある貴重なものを紹介させて頂きました。参考になれば幸いです。ご静聴ありがとうございます。

■参考文献

- ・『塩竈市の文化財ガイド』塩竈市教育委員会 二〇〇五
- ・『塩竈市文化財調査報告集第三集「杉の入裏築跡」』塩竈市教育委員会 一九九〇
- ・『塩竈市史Ⅲ 別編Ⅰ』塩竈市 一九五九
- ・『塩竈市史Ⅳ 別編Ⅱ』塩竈市 一九八六

i 藻塩焼神事 我が国の古代製塩法を伝える特殊神事で、七月四日の海藻を刈りとる「藻刈神事」、五日は満潮時の海水を汲みとり神釜四口に注ぐ「水替神事」、六日は平釜に蓄えた潮水を煮詰めて荒塩を採集する「藻塩焼神事」が行われる。内容に変遷があったことも考えられるが、古式に則り原初的姿を伝える一連の塩作りであり、民俗学的、歴史的にも価値の高い神事で宮城県無形民俗文化財に指定されている。

ii 須恵器 日本古代の青灰色の硬質土器で平安時代まで生産された。ろくろを利用し、穴窯で高温で焼くことにより作られる。同時期に生産された土師器とは色、質により区別される。五世紀に朝鮮半島から伝来したとされる。

iii 内社 律令時代の法典で弘仁、貞観の二式とその後を式を大成した「延喜式」の神名帳に記載されている神社で神祇官の奉幣を受ける「官幣社」と国司の奉幣を受ける「国幣社」の別がある。

iv 大日如来 真言密教の教主で「大日」とはサンスクリット語で「偉大な輝くもの」の訳。音写は「摩訶毘盧遮那(まかびろしゃな)」で光明遍照を意味する。

v 留守分限帳 御館之人数、宮里之人数、里之人数の三冊よりなり、現在奥州市立水沢図書館に所蔵されている。留守景宗の時代の家臣の知行高を記したものである。

第三部

塩竈学フリートリーキング

「千賀浦の景観を未来へ引き継ぐために」

藤沼邦彦氏

高橋守克氏

渡辺誠一郎

(塩竈市教育委員会教育部長)



杉の入窯跡レプリカ
(現在は公民館図書室に展示)

◇渡辺部長

教育委員会の渡辺です。よろしく申し上げます。今日は、千賀の浦の魅力ということで、お二人の先生にお話して頂きました。幅広いお話でしたので、会場の皆さんはさらにお聞きになりたいこと、多々あるのではないかと思いますので、その辺も含めて、いろいろな意見交換といいますが、理解を深めていく場にしていきたいと思います。よろしく申し上げます。

藤沼先生には、「タイムシップ塩竈」という小さな博物館を図書館の付属施設として整備したときに、いろいろアドバイスを頂きました。展示の内容も含めて適切なアドバイスを頂きました。今日お話に出た鼻節神社の厨印のレプリカも展示していますし、守克先生の資料最後のページにありました木簡ですね。「竈木20人」というのも、「塩竈」という字がついている木簡のレプリカも、

塩竈に関係している遺物の一つだということで、展示させて頂いています。それと、ちょっと先ほどの訂正ですけども、守克先生がお話したあの杉の入の窯跡のレプリカは、現在は公民館の入り口に設置していますので、後でゆっくりご覧頂けるとかと思っています。

今日は、多方面に縄文の遺跡の話や、人文的な鎌倉のお話など非常に幅広いので、進行役としては難しいですが、よろしく申し上げます。

はじめに、疑問点があったのでその辺をお聞きして、あとは会場の皆さんが先生方に直接ご質問していただく時間をとりますので、よろしくお願ひします。

まず私なりに疑問の一つはですね、藻塩焼神事。藤沼先生にお聞きしたいのですけれども、藻塩焼神事、鉄のある種、鉄の文化の一つの象徴の神事だと思っんですけど、塩を作る神事というのは日本には塩竈以外にはあるんでしょうか？

◇藤沼

一般に塩関係のもので古式に則っているという事で紹介されるのは鹽竈神社が一番多いので、たぶん他には無いと思います。それから「藻塩焼」という言葉にもいろいろ問題があります。

◇渡辺部長

日本各地で塩作りの遺跡遺構って結構あると思うんですけども、まず製塩土器ですよ。その後、鉄器それから塩田みたいな形でも塩を作ると聞いたことがあるのですけれども、鉄っていうのは、

東北のましてや塩竈に、そういう神事といいますがね、残ったっていうか、特徴的な塩竈なのかというところは、どうなんでしょうか。

◇藤沼

神事として大切に伝えられてきたということしか分かりません。

◇渡辺部長

芭蕉の来るちょっと前から江戸時代に塩竈の町中に釜がゴロゴロしていたっていうのを何かの本で見たことがあるんですけども、その時代でも塩竈って鉄で塩作りみたいなことをしていたのでしょうか。

◇藤沼

塩竈でも赤穂でもどこでも鉄でみんな作っています。それから御伽草子の文正などに出てくるものの中にも鉄釜があります。それは、江戸時代の柄鏡の文様には「三保の松原」があって、富士山の絵を描いています。注意深く見ると、三保の松原に「塩釜」が描かれているのが分かります。

◇渡辺部長

それと、鉄なんですけれども、鉄を精製するのした鉄の遺構は塩竈近辺には見つかったのでしょうか？ 例えば奈良、平安とかですが。

◇藤沼

奈良・平安時代では、あれほど大きな鉄釜は作られなかったと思います。その証拠は製塩土器がたくさんあるということです。西日本では鉄釜が作られています。すごい貴重品だそうです。こ

の付近では、奈良時代のものですけれども、多賀城市柏木という所で製鉄遺跡が発見され国指定史跡になっています。

◇渡辺部長

ちょっと話があっちこっちいって申し訳ないのですが、塩竈という地名を含めて鹽竈神社のことについて、司馬遼太郎が『街道をゆく』の中でふれています。ある種、技術性というか神の力みたいなの、そういうものが塩をつくる人たちにあったと思われると言っているんですけども、特に塩竈で塩作りが行われて、そして藻塩焼の神事、鉄釜の神事が行われて鹽竈神社という神社があるというの、この地域は特別なんでしょうか？

◇高橋

「しおがまじんじゃ」って名前がつく神社は結構あるんですね。全国にとっても多いわけではないんですけども、数はいくつもあります。ただこのような形の大きな格式の高い神社である「しおがまじんじゃ」というのは、ここが全国で一番だと思います。そしてまさに先ほど藤沼さんが触れましたけれども、塩作りの人々が信仰し、またそれが国家として一つの神社を主に崇敬したと言いますか、そういった立場にあった大きな神社でその時存在したんだと思います。その後、中世を経て近世ずっと伊達家の庇護が続くまで、塩竈の鹽竈神社についてはそのような形になっているんじゃないかと思えます。ですから塩をつくるころは

全国にいろんな所であるんですけども、塩竈っていうのはそういう意味では特別な所だと言えると思います。全国でもこの塩竈は特別のものだと理解したほうが良いのではないかと思います。

◇渡辺部長

ちょっと単純な質問で申し訳ないんですけど、縄文時代の縄文人というのは、塩はどういうふうな摂取というか、どうやって塩を作って、どういうふうな生活との関わりを持っていったんでしょうか。

◇藤沼

縄文時代は狩猟採集経済です。松島湾の縄文人は縄文時代晩期になると塩作りを始めます。その方法は土器に海水を入れて煮詰め、塩の結晶を取り出す方法です。ただし、縄文時代には全国どこでも塩作りをしているわけではないですね。

◇渡辺部長

縄文のお話がでたので、藤沼さん青森にいらしたということなので一言聞きたいんですけども、松島に非常に貝塚が多くて縄文を含めて遺構が結構多いですよ。全国ベスト5ぐらいの遺構が多い地域だと聞いたことがあります。例えば青森の「三内丸山遺跡」は非常に有名ですけども、あの遺構と松島湾の縄文の遺構ではどう違うかがあるんでしょうか。生活の仕方、海とか山とか自然の異なりとか、いろいろあると思いますが。



三内丸山遺跡の復元六本柱建物（青森市）

◇藤沼

青森県では貝塚は八戸とか陸奥湾の一部にある程度です。三内丸山遺跡は大きな遺跡ですが、基本的には松島湾の遺跡群と変わりはないと思います。

◇渡辺部長

三内丸山の場合は、結構遠くの地域と交流していたと言われていますよ。縄文時代は縄文人が新潟の糸魚川の辺りまで行ったという説、あるいは沿海州まで渡ったんじゃないかという説。

◇藤沼

松島の縄文人は「オオツタノハ」という奄美諸島以南でしか取れない貝殻とかを入手しています。縄文人は、欲しい物を手に入れる手段を持っていました。先ほどもお話したのですが、松島湾の塩

は山形県の尾花沢まで運ばれています。それから秋田県でたくさん採れるアスファルトは、塩竈付近の貝塚から出土する釣り針に付着しています。このアスファルトは接着剤として利用している訳です。

◇渡辺部長

宮城県はこの松島湾でも同じように考えていいということですか？

◇藤沼

はい。

◇渡辺部長

わかりました。色々私もっと聞きたいのですが、せっかくですので会場からどなたかお二人の先生にご質問があれば、お手を挙げてからお願いします。

◇質問者①

「藻塩焼」の話が出ましたので関連としてちょっとお聞きしたいのですが、そもそも藻塩焼神事の「藻塩焼」ってというのは、聞きましたところ鹽竈神社における御釜神社で行われる藻塩焼は、ホンダワラに付着して濃厚になった塩に海水を注いで溶かして鹹水、塩の多い水をつくって煮詰める、ということなんですが、もう一つの説によりますと「藻塩焼」と「焼」がつくものですから、一旦塩水をかけて塩分は水溶性ですから水分には溶けやすいので残ったホンダワラを最後に焼いて鹹水を加えて塩を作った。このように、ホンダワラを焼かない場合と焼く場合の二通りあると思うんで

すが、塩竈は前者の焼かない方の塩作りというふうに解していますけど、焼くということは、広辞苑を引きますとはっきり出てきますから、私は塩作りには二通りあるのかなと思った訳です。

◇藤沼

私は先ほど二通りあるとお話しましたけれども、「藻塩焼」は本当に塩を焼いたのかは、考古学研究者の中でも議論が分かれています。

◇質問者①

それともう一点ですけれども、ちょっと話が違いますが、先ほどお話がありましたとおり「松島」は死者が集まるところであって、雄島から骨壺が出てきたという話をされましたけれども、その骨壺は、愛知県の渥美半島それと知多半島から焼かれた骨壺であるということで、この愛知県の渥美半島というところは国宝に指定されている秋草紋様の壺もある。ですから、愛知県の両半島で作られた焼き物は、普通日常に使うのではなく、何か特殊な良いものに使われる焼き物を作っていたと思われまますけれども、その有名な渥美半島、知多半島における骨壺が、松島に來ているということとはかなり知名、身分の高い人の骨を埋葬したのではないかと、そして骨壺のあるところには、普通は五輪（塔）が建つ訳ですが、ここにはそれがありません。そうしますとこれはいわゆる分骨という形をとりにまして祈禱者はこの近くの者でなくて、どこかもっと遠くの人の分骨をされたんじゃないかというふうにも考えられますが。

◇藤沼

知多半島と渥美半島で特殊なものしか焼かないというのは違います。多くは日用雑器です。中世の焼き物というのは民衆の使う雑器として広く流通するところに特色があります。

それから分骨については、おっしゃるとおりだと思います。

◇質問者①

あと一点ですけれどね、渥美半島では、奈良の大寺の瓦を作っているんですね。愛知県の渥美半島と岡山県との両県から東大寺の瓦が作られています。

◇藤沼

その通りです。一般ではその頃は屋根瓦を焼いても使っていませんので、一般の人が使う瓦は焼いておりません。

◇渡辺部長

ありがとうございます。別の方、どうぞ。

◇質問者②

実は私は「融ヶ岡」という地名は存在しないと思っております。それは、ご存知のように一七一九年に春日御所を作って、彼は中央政権の歴史の中で、伊勢物語などにもあるんだよという話をしましたけれども、こういう村の形で「塩竈」の地名があるということは、言いたかったと思うんですが、彼は全然何も言わなかったんです。ところが、その後に出た塩釜村風土紀や塩竈地名集（奥塩地名集）やその他の古文書でこういうことには一切

触れられていない。それで一八二二年、要するに100年たった時に「塩松勝譜」に初めて、今の愛宕神社あたりと私は思っていますけど、融の「融公亭」があったということが、塩竈の人達が話しているからそれは虚偽であると書いてあります。もし源融がやって来たならば、このところに邸宅を作ったのだらうと紹介したのかも知れない、ということなんです。今の融ヶ岡の石碑は大正年間頃に作られて、塩釜高校に建っています。その後「融ヶ岡橋」の名前については、独り歩きして、勝手に動いていってできたのだと私は考えています。だから、あと何十年もたつと「融ヶ岡橋」もあって、「融ヶ岡」は何だろうというようなことになるので、いけないんじゃないかと思っています。

◇藤沼

「融ヶ岡橋」は塩竈市が命名したのですか？

◇渡辺部長

市民からの募集、たしかアイデアを募って付けたものだと思います。ただ歴史的にそういうものが残るかどうかというのは別だと思っております。融ヶ岡に隣接した橋ですので一つの記念の橋として使ったと思います。

◇質問者②

塩釜高校の新聞も「融ヶ岡新聞」だから、「融ヶ岡」とつけたということを知ることがあります。

◇渡辺部長

無関係では無い場所なんですね。それについて色々論議あると思いますけれども。直接何かお二人にご質問あれば。

◇質問者③

高橋先生の方にファシリテーターの渡辺さんがお話ししていた、鉄の竈以前の土器の縄文末期の塩の詳しい作り方も含めて教えて頂くと助かります。

◇高橋

縄文末期の製塩土器。実は縄文末期の土器といえますのは、一般の土器は非常に精巧に出来ていて焼上がりも光沢があつて、緻密ちみつですごく硬くて急須なんかも作れるくらい優れた技術で作られた土器なんです。ところがこの塩を作るための土器は結局、最後はぼろぼろに割れて先ほど藤沼さんが写真でお見せしましたけれどもこんな小さい破片になってしまいうくらい高熱で加熱を受けてしまいますので、そういった面できちきちとがっちり作らないんですね。ですから粗雑な感じのする表面もざらざらの土器が多いです。そして作り方は、いわゆる「輪積み」と言われているんですが、小さな輪を作ってそれを重ねていって最後は隙間が無いように仕上げるものと、ぐるっと粘土紐を長くしていってこれを蛇みたいにしてぐるぐる巻きにして作るというような作り方がありますが、だいたいそんな二つの方法ですね。いわゆる水漏れがないようにということを目指して作るの

で、塩作りのためのものは、縄文の晩期の土器に比べれば粗雑であるのが分かります。加熱を受けてポロポロになっていくので、なかなか全体の大きさとか形が復元されません。ですから作り方としてはそういう二通りの作り方でやっています。そして底は、むしろ先の尖っている方が多いですね。

◇渡辺部長

よろしいでしょうか。



◇質問者④

鹽竈神社についてちょっとお伺いしたいんですが。明治の初めに廃仏毀釈と同時に全国の神社に社格を決めたときにですね、鹽竈神社の一番最初はどういう社格だったんでしょか？途中から志波彦神社さんが移って「官幣中社」ということで社格を決められたときには鹽竈神社の社格はなんであってかかってというのが知りたいと思ってます。

◇高橋

わたしもその頃のこととはちょっとよくわかっていません。すみません。

◇渡辺部長

さっきの『延喜式神名帳』からいうと、志波彦神社のほうがいゆる律令制の神社としてきちっと掲載されているので、志波彦神社のほうが優先されてまず位置づけられたと。鹽竈神社は明確に位置づけられてないので、結果として今は志波彦神社、鹽竈神社との順序で言うようになったと思います。

◇質問者④

そういうことは最初、社格はなかったということですか？明治の初めには？

◇渡辺部長

決める過程でそういう議論があったと聞いたことがありますが、ちょっと私も専門じゃないので。

◇藤沼

その辺は『学生社』で一般に手に入りやすい本

として昔の鹽竈神社宮司押木耿介さんの「鹽竈神社」という本があります。塩竈市の図書館にあると思いますので、それを読まれると良いかと思えます。「式内社」というのは平安時代の「延喜式」に基づいて、全国の神社の格式を書いていく訳ですが、それに鹽竈神社は今渡辺さんがおっしゃったように入っていないんです。でも、「延喜式」より百年くらい古い「弘仁式」に陸奥の鹽竈神社に一万束の稲を納めるという記事があります。ですから、鹽竈神社は「式内社」のような大きな神社として「延喜式」の百年前にもう国から認められていたということは明らかだと思います。明治になると、また別の格付けが必要になりますが、私にはよく分かりません。

◇渡辺部長

他にご質問ある方いらっしゃいますか？

◇高橋

鹽竈神社の話が出たからですが、藤沼さんもお話しましたけれどもいゆる「延喜式」に載っているそれらの神社というのは鼻節神社に行ってみてもわかるように規模はあれくらいなんです、大抵この辺の「式内社」は。みなさんよく鳴子に泊まったりすると思うんですが、鳴子にも同じように温泉を祀った神社があるんですね。そういう神社がすぐ町の中にあるんですけどそれらの規模は鼻節神社とあまり変わらないような規模なんです。

じゃあ鹽竈神社はどうかというと、そういう国から保護を頂いてるんですけどもって大きい神社じゃなかったかなあと思うんですが、なにせ現在の残ってる社殿は、江戸時代のもので、それ以前の鹽竈神社はいったいどういう神社だったのかというの具体的には分かっているんでいいですね。ただ、言えることは代々そういう、中世もそうですけど留守氏やあるいは伊達氏によって保護されるくらいの神社で、最後は伊達氏に今のような社殿を造られるくらいの神社ですので相当な規模だったんだらうなというのが想像できますけど、ただ場所も実際は最初の鹽竈神社のものは分かっている。

ですから鹽竈神社の御遷宮等々でお建替えになるときはぜひ下を掘らせていただきたい。掘らせていただければ分かる。実は出雲大社がありますよ。今の建物もあるんですが昔の伝えとしてですね、大きな木で作った柱が支えるスロープを登って高いところに社殿があったという伝説が残っていたんです。そこで出雲大社の実際の工事に先立って調査をしましたらこんな太い柱が出てきましたね、それが三本結わえられている。そしてそれが建てられていた。あの伝説は本当だったんだというのが分かったんです。

鹽竈神社ではそういうことが今まで行なわれていなかったために分からないのですが、古代の鹽竈神社は本当にあの場所だったのか、規模はどの

くらいだったのか、ぜひ私も知りたいなと、おそらく塩竈市民の方も知りたいなあと思ってるんだと思います。ぜひそういう機会があったら私も宮司の鍵さんにお話したいと思うんですが、市長さんを始めみなさん方からもそう言われるとまた鹽竈神社の格が上がってくるんじゃないかなあと私は思っています。

◇渡辺部長

前に神社の敷地内から土器片が見つかったという話を聞いたことがあるのですが、ということとは鹽竈神社の境内に遺跡がある可能性もあるということなんでしょうか。



鹽竈神社（国指定重要文化財）

◇高橋

鹽竈神社の遺跡で土器が見つかっているっていうのは、表坂を下の西町の方から上ってちょっと行ったすぐ左手のところに、いわゆる製塩の土器が見つかっているんです。ですからあの辺でも製塩が行なわれていたなあとというのが分かるんです。ただ、その敷地には鹽竈神社が建つわけではないので、そういうことで本当の鹽竈神社っていうのはどこにあったのか、たぶん今のところではないかと思うんですがそれはちょっと規模もわからない。

今、藤沼さんと話してたんですが、実は瑞巖寺でも博物館を建てるときにその下を傷めないように事前に調査をしたんですね。瑞巖寺も調査をさせてくれるんです。その結果、その下に古い時代の瑞巖寺の前の「延福寺」という時代の建物の跡があるというのが分かったんですね。ですから鹽竈神社もぜひ調査をさせていただきたいものだなあと、そうすればいろんな面で分らない鹽竈神社が改めて脚光を浴びて浮き彫りにされて、全国からぜひ多賀城に行ったついでに古代の鹽竈神社を見たいものだなという方々もたくさん訪れる、賑やかな西町界限に変わっていくのかなあと思っています。

◇藤沼

鹽竈神社も古い時代のことについては分かりませんが、発掘すれば「弘仁式」時代のものが出るかも知れません。今度、国宝の瑞巖寺の本堂が解

体工事に伴って発掘調査をするそうです。鹽竈神社も工事をするときに、やはりその下を掘っているのは重要なことだと思います。「千賀浦の魅力」を後世に伝えるためにも、やはり鹽竈神社はそういう意味では発掘調査した方がいいでしょう。

◇渡辺部長

鹽竈神社は江戸の四代目綱村のときに現在の様な神様を決めたみたいな経緯があって、いわゆる「謎の神社」ですよ。その反面非常に歴史があるということなので、今藤沼先生なり守克先生のお話にあつたように、やっぱりきちっとした科学的な調査を是非して、一体昔はどうだったのかと知りたい気持ちにはなりますね。その他にどうぞ。



◇質問者②

鹽竈神社で私がいろいろ疑問にあるのは「延喜式内社」ですが、これはだいたいみんな平安時代あたりに、正四位か五位くらいになってるんですが、鹽竈神社は位が無いんですね。それで平安時代に奥州一宮になってる訳ですけどそれでも位が無いんです。位を貰ったのは伊達宗村の時代の享保年間近くだったと思います。だから創立期の鹽竈神社っていうのは分からないけれども、江戸時代までなぜそのままなのかというには、触れていませんね？という事で、私がいつでも疑問に思っていることにちょっと触れさせて頂きました。

◇渡辺部長

謎の鹽竈神社ですね。それは「東北夢の謎」みたいなどころはあるのですかね。そのほかご質問ある方いらっしゃいますか？

ところで、ちょっと一言聞いたのですけど、雄島の話出ていますけども魂が集まる場所、霊場的な意味があったというのですが、あれは風景みたいなところも関係するのでしょうか。景観っていいですか。

◇藤沼

私は死んだらどこに葬られてもいいけれども景色の悪いところよりは景色の良い所のほうがいいですよ。やはり松島のように風景が良く波静かな所に死者が集まるということは、あるんじゃないかと思います。

◇渡辺部長

それと、藤沼さんの資料に箱庭的、日本的な優しい風景みたいな表現があったと思うんですが、これ、日本的なんでしょうか？ 美意識としては。

◇藤沼

私は明らかに日本的だと思いますね。日本文学の中で継承されて大事にされてきたと考えています。ですから「源氏物語」や「枕草子」もそうですし、「古今集」にも取り上げられています。他に知っている範囲だけで言うと「今昔物語」、在原業平の「伊勢物語」などにも出てきて、実話をエピソードで描いたようなのもたくさん出てきます。そして、融が本来にきたかどうかは分からないですけども、「都」の人にとって多賀城に赴任して、すぐそばのそれほど不便じゃないところに「松島」という風景の良い所があるというのがやっぱり口づてに伝わって憧れたんじゃないかと思えます。文学などで取り上げられて「松島」は、こういうものだとして規定され、固定化されていくんです。そういう中でいろいろな作品が生まれてきておられます。

◇渡辺部長

関連することですけど、当時の都人から見ると律令制の京文化から見ると、やはり辺境ゆえに、そういう美意識もさらに増幅された部分ってあるのでしょうか？

辺境、場所は「かかる道の果塵土の塚まで」いわゆる田舎の先にこんな鹽竈神社があったとかね。

こういう古くから伝わっているそれこそ「目盲法師の琵琶」の演奏を聴いてしみじみ感じたりするのは、こんなところまでこういうことをやられている。と、辺境意識って、ずっと引きずってきた裏返しとしての美意識なのでしょうかね。

◇藤沼

それは、渡辺さんはそう思っているかもしれませんが、私たち辺境の人間として、やはり抵抗がありますね、そういうのは。

◇渡辺部長

いや、私は思っていないから言っています。

私、俳句をやっているのでちょっとこだわってしまうんですけど、やっぱり芭蕉あたりの美意識の裏には古代の美意識、東北に対する辺境意識みたいなありますよね。奥の細道なんていうと本当は江戸時代になるとそういう意識はあえて持たなくてもいいんですけど、あえて能因法師とか、西行とか中世のそういう美意識の裏付けといえますか、後ろだてしながら東北を見ている、歩いてるところが唯一気になるところなんですかね。

他にご質問あれば、どうぞでしょうか。

◇質問者⑤

鹽竈神社で行なわれた神事の塩作りというのがまったく神事のためだけの塩であってそれを何かにしたっていう記録はないんでしょうか？何か吉津のあたりで釜とかなんかが見つかったって話はあるんですけど、それと鹽竈神社の繋がりは多少は頷ける面もあるんですけど、なんか塩竈ではそ

ういう伝統的にお酒なんかありますけども、伝統的に塩は何をどうしたとかっていうような記録があるのかどうかってずっと疑問に思っていたんですけどいかがでしょうか？

◇高橋

先ほどお話ししましたように、この千賀浦周辺では縄文時代の終わり頃から塩作りが始まるんですね。それは土器に海水に入れながら煮詰めて塩を作っていくっていう方法でずっと続くんですね。そして先ほども出ましたように、古墳時代の頃ちょっと中断してまた多賀城の造られたころに再開されています。そしてその頃に鹽竈神社が出来たんだと思うと考えているんですね。そして作り方はまたずっとこの土器による作り方をしているんですね。

そして平安時代の中頃になって土器で作った塩作りが見つからなくなるんで、それは鉄釜に変わっていったんだらうという考え方なんです。じゃあ、その頃の鉄釜っていうのは実際はまだ見つかっていないんです。ただ、鹽竈神社や御釜神社に伝わっている釜を見るとあれは鎌倉時代のものなので、大きさは多少違うかも知れませんがちょっと週ればあんなものに近いものだったらうと考えています。ただ釜の下は藻塩焼神事で使用されているような立派な竈ではなくて、おそらく石を、私たちが合宿なんかしたときに、あるいは秋にもみじ狩りをするときに石を組んでその上に鍋のせて芋煮をしますよね。そんな感じの下の竈を作っ

いわゆる鉄釜を置いて行ったのが鉄釜の製塩の始まりではないかなあと考えています。そういった鉄釜が導入された後に鹽竈神社ではああったような儀式を行いながら、当時の塩作りの様子を残すものだろうと考えているんです。

ただ、ちょっとイメージが違うのは、今ではないわゆる「神事」となっていますので幾分儀式化されてしまっ、本来のあり方よりはちょっと儀式っぽくなっているんじゃないかなあというのが私たちの考えです。ですから鉄釜が導入されればあいうような形に基本的にはなると思われますが、それが今も残されているので貴重なものだと思われ捉えられているんです。

◇質問者⑤

そういう意味ではなく、本当に「製塩」という仕事を生業にしていたという記録があるのかどうかということなんです。「塩竈」では神様はというと伝統的にしていますよね。その地その地で独特のものとして、ずっと引き継がれてきていますけども、塩竈にはそういうものが塩水だから何もないので、これは単なる神事としてのみ残っているだけでは無いと解釈したんですけど違うのでしょうか？やっぱり一般人でも塩作りして商売みたいにしたっていう記録があるんですか？

◇高橋

実は記録に残っていないです。そういったことで生業としてやってきたかどうかはちょっとわからないですね。ただ、先ほども言いましたように

古代だけじゃなくて中世でも吉津や藤倉やそういうところでも特別なやり方で塩作りが神社の管轄で行なわれていますので、一部そういったようなものは続けられているんだと思います。



◇藤沼

今、守克先生がおっしゃったのは越の浦、藤倉、吉津っていう所ですね。留守分限帳の財産目録に家臣が持っている「越の浦」の釜、あるいは「藤倉」の釜、「吉津」の釜が出てますので、十六世紀の頃は塩竈で塩を作っていたのは確かでしょう。それから古代においても文献はありませんけど、多賀城跡から塩を作るときの薪の話を文字で書いた木簡が出土しております。おそらく塩竈周辺の塩作りに関連するものだと思います。

◇渡辺部長

いろいろ質問いただきましたけれど、だんだん

時間が迫ってきました。融の話がでたので、先ほど市長のご挨拶のなかで京都に行かれたお話をしていたいただきましたけど、向こうの京都の人の塩竈との関わりですね、どんな感想をむこうの人たちは持たれたのか、交流を通してその辺をちょっと一言ご披露いただければと思うので、せっかくなので。

◇市長

ふいに私にふられました大変恐縮であります。確かに今日いろいろなご意見を頂戴しているなかで、源融のような本場に按察使としてこちらに赴任したかどうかということについては二年くらい前、塩釜商工会議所が開催いたしましたシンポジウムの際にも向こうの学者の方からは、来ていないという説のほうが有力ではないかというようなお話を頂きました。こういう一生懸命議論して頂いている中で、汲み取る発言としては極めて不穏当かも知れませんが、どちらかという部分についてはやっぱり地元の方々の夢とか希望というものを繋いでいくということを、我々の立場としてはこのまちづくりの中に活かすということです。具体的に申し上げれば北浜沢乙線沿いに「塩竈百選」と言いますか、塩竈にちなんだ「ゆかりの和歌」等を配置をさせていただいております。ああいったものをですね、我々は単に塩竈の人だけではなくて広く多くの方々にご覧頂きたいということがあります。

今回、京都の方に参りましたのも、塩竈という陸奥国の奥地にですね、こういったものが脈々と

受け継がれております、ということをお話をさせて頂きたくて上がりました。

200人ぐらいの方にお出で頂きまして、受付に「塩竈コーナー」っていうものを作りましたが、残念ながらその内の100人は『塩竈』ってどこにあるんですか?と聞かれまして、愕然といたしました。それが現実であります。例えば、関東くらしまでですと「塩竈」っていったらもっと多くの方々にご理解頂けるのかと思いましたが、残念ながら関西っていうところまで参りますと「塩竈」という知名度がかくも低いのかと実は愕然といたしました。やっぱりこちらに足を運んで頂くためには、我々がもっともっとしっかりとした情報発信していく、あるいは一度足を運んで頂いた方々にもう一度行ってみようと、そういう気持ちを起こさせるような、やはり様々な歴史文化っていうものをもっともっと磨き上げていかなければならないんだろうと。昔はよく、これもあれもという時代もございました。先ほどいろいろみなさんから頂戴いたしましたように、実は私も県庁時代に港湾という仕事をやっていまして、今日会場にも当時の部長が上のほうに来てましてですね、我々はまさに作業進行の為に最優先されるということの中で、残念ながら今改めて振り返りますとそういうものを無くしてきたというのも事実であります。私も今後はそういったものを大切にしていこうということをしつかりまちづくりの中に見続けていきたい。そういうことをしみじみと反省させられました京都詣出でありましたし、もう一つ先ほ

どもお話していたんですが六条河原院が当然無い訳であります、その一部分を模したと言われる「涉成園」に数名で参りました。その中には「塩竈」にちなんだ名前が至るところにございました。この古くからの都「京都」の中に「塩竈」の名前が残っているということについては、我々も、もっともっと勉強しながらそういった交流を積極的に進めていくことによって、また新たな角度でのまちづくり等もできるのかなと、そんなことを多くの市民の皆様方に未来の夢として持っていたいただけるようなまちづくりをしつかりと進めさせていただきたいというのが今回の京都に参りました感想でございます。

ちょっと答弁にならなかったかも知れませんが、みなさま本日に今日はですね、様々な角度からご意見を頂戴し、お二人の先生にそれにしつかりとお答えを頂きました。ぜひこういったシンポジウムを今後とも数多く重ねさせていただきなから、改めてこの塩竈の魅力というものをしつかりと磨き上げて参りたいと考えております。

今日は本当にありがとうございます。



◇渡辺部長

先生方のお二人から、何か一言お話がありましたら。

◇藤沼

今の市長さんの話を聞いて非常に興味を持ったのですけれども、京都に河原院を復活させて塩竈の庭園を作りませんか？そこに毎月30トンの海水を塩竈から運んで、塩作りを再現させたら、みんなびっくりすると思います。でも、塩竈にたくさんの方が来てくれないと困ると思いますが。先ほど市長さんの話を聞きながらそう思いました。どうもありがとうございました。

◇渡辺部長

守克先生、一言あれば。

◇高橋

実は、私はずっと文化財の調査を藤沼さんとやってきましたんですが、さっきの新浜の貝塚もみんなそうですけども、本当に港湾調査で息絶え絶えになった遺跡の調査を行って、せめてこれだけは塩竈に残していきたいな、記録だけでもということ、藤沼さんと取り組んできたんですが、やっぱり塩竈の魅力はこれで終わりにはしてはいけないと思います。やっぱりここから皆さんのお知恵を拝借しながら、行政の方のお知恵を拝借しながらみんなで、やっぱりもう一度「塩竈」って何だろうって、「松島」って何だろうということを確認め合って、それをどうやれば再開発と両立させながら心に「抛り所」ができるのかなあというのを模索し

ていきたいなあと今日は改めて思いました。

今日はありがとうございました。

◇渡辺部長

今日は「千賀浦の魅力」ということで「ーその景観を未来へ引き継ぐためにー」という副題がついておりました。昔読んだ小林秀雄という有名な文芸評論家の言葉に「名歌は名所より長し」という言葉があるんですね。「名所」はいつか壊れるけど「言葉」というのはずっと残っていく、みたいな意味なのですけども、芭蕉も奥の細道で辿ってくる、歌枕が詠われた地が無かったり、まあそういうところで思い出し、しみじみと不易流行を感じたって説もありますけども、やはり新しい言葉を作っていく必要があるのかなあ、と私は思うのです。物、あるいは風景っていうのは、やがて変わっていくので、新しい千賀浦の風景と同時に、新しい千賀浦の風景の「言葉」を作る必要があると私は思うんですね。というのは明治以降、正岡子規とか茂吉とか宮沢賢治とか来て塩竈のことにけっこう触れている訳です。正岡子規は神社に来て泉三郎の鉄の灯籠を見て「700年来の昔をしみじみと感じる」なんて言っています。芭蕉は「500年来の面影」と言っているんです。この芭蕉の言葉を踏まえて言っている訳なのです。そういう言葉が次の世代に我々の世代に、そして若い人達に繋がっていきばいいかなあと思うんですね。そうすると「塩竈」という名前、あるいはイメージがいつまでも末永く続いていくのではないかと

いう気がします。同時に考えなければならぬのは、民俗学者の柳田國男の「何が新しく生まれた美しさで、何が失われた大切なものを次に考える」ということですね。我々は非常に大切なものを数々失ってきていると思うんです。でもやっぱり新しく生まれる美しさを発見していくってこともすごく大事ななあという気がします。そのためには千賀浦の歴史、いろんな先人たちの言葉、作ってきた風景、作ろうとした風景をきちっと学ぶところから始まるのかなあという感じがします。

今後皆さんと一緒に塩竈にまつわるテーマを考える機会を作っていけたらと思います。今日は皆さんご清聴ありがとうございました。

■参考文献

- ・『塩竈市の文化財ガイド』塩竈市教育委員会 二〇〇五
- ・『塩竈市史Ⅲ 別編Ⅰ』塩竈市 一九五九
- ・『塩竈市史Ⅳ 別編Ⅱ』塩竈市 一九八六
- ・『特別展 奥州一宮鹽竈神社』しおがまさまの歴史と文化財』東北歴史博物館・鹽竈神社 二〇〇七
- ・『塩竈・松島 その景観と信仰』瑞巖寺・志波彦神社塩竈神社・東北歴史博物館 二〇〇八
- ・『宮城県百科事典』河北新報社 一九八二

第7回塩竈学シンポジウム

「千賀浦の魅力～その景観を未来へ引き継ぐために～」 概要

1. 日 時 平成21年3月29日(日) 13:00～16:00
2. 会 場 ふれあいエस्प塩竈 エस्पホール
3. 参加者数 60名
4. 主 催 塩竈市教育委員会（主管：生涯学習課 協力：生涯学習センター）
5. 概 要

開演・市長挨拶

第一部

基調講演 「千賀浦の魅力」 13:00～14:00

藤 沼 邦 彦 氏（元弘前大学人文学部教授）

<休 憩>

第二部

講 演 「千賀浦を取り巻く文化的遺産」 14:20～15:00

高 橋 守 克 氏

（多賀城市立山王小学校校長、塩竈市文化財保護委員会副会長）

第三部

塩竈学フリートーキング

「千賀浦の景観を未来へ引き継ぐために」 15:00～16:00

藤 沼 邦 彦 氏

高 橋 守 克 氏

司 会：渡辺 誠一郎（塩竈市教育委員会教育部長）



会場の様子

第四次塩竈市長期総合計画リーディングプロジェクト
海・食・人が活きるまち〜個性きらりプロジェクト

郷土への愛着を育む「塩竈学の構築」

塩竈学問所公開講座ブックレット

平成二十年度 塩竈学シンポジウム報告集

ちがのうら 千賀浦の魅力

〜その景観を未来へ引き継ぐために〜

平成二十二年三月発行

発行 塩竈市教育委員会

編集 塩竈市教育委員会教育部生涯学習課

〒九八五―〇〇三六

宮城県塩竈市東玉川町九一

(塩竈市生涯学習センター内)

電話 〇二二―三六二―二五五六

FAX 〇二二―三六五―三三四二